

古志運動広場等整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

こ 古 志 遺 せき
し 跡

2005年12月

出雲市教育委員会



古志遺跡 空撮写真

序

出雲市文化財課（前：文化財室）では、市管財室（前：財政課）からの依頼を受け、古志運動広場等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりましたが、今年度の調査報告書の刊行をもって終了する運びとなりました。本書は、平成15年度に発掘調査を行った古志遺跡の成果をまとめたものです。

これらの遺跡が所在する古志地区は、県内でも有数の遺跡密集地帯となっており、数多くの歴史的文化遺産が残っています。

本書に掲載した古志遺跡からは7世紀後半から9世紀初までの掘立柱建物群が確認され、神門郡家との関連も考えられています。

こうした調査成果は、出雲地域の歴史を解明していく上でも貴重な資料になるものと思われます。本書が地域の埋蔵文化財に対する理解や歴史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり御協力いただきました地元の皆様をはじめ、関係の方々に対して心から御礼申し上げます。

平成17年12月22日

出雲市教育委員会

教育長 黒目 俊策

例　　言

1. 本書は、出雲市財政課（現：管財室）の依頼を受け、市文化財室（現：文化財課）が平成15年度に実施した古志遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

平成15年5月12日～12月22日

3. 発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

出雲市古志町1954番地ほか

4. 調査は次の組織で行った。

平成15年度（発掘調査）

【調査指導者】原田敏照（島根県教育庁文化財課 文化財保護主事）

【事務局】板倉 優（出雲市芸術文化振興課長）、川上 稔（出雲市文化財室長）

【調査員】遠藤正樹（出雲市文化財室 副主任主事）

佐々木紀明、佐藤睦子（同 臨時職員）

平成16年度（整理作業）

平成16年4月1日～平成17年3月21日

【事務局】板倉 優（出雲市芸術文化振興課長）、川上 稔（出雲市文化財室長）

【調査員】遠藤正樹（出雲市文化財室 副主任主事）

高橋亜紀（同 臨時職員）

平成17年3月22日～31日

【事務局】神門 勉（出雲市文化財課長）、川上 稔（出雲市文化財課 主査）

【調査員】遠藤正樹（出雲市文化財課 主任）

高橋亜紀（同 臨時職員）

平成17年度（報告書作成）

【事務局】神門 勉（出雲市文化財課長）、川上 稔（出雲市文化財課 主査）

【調査員】遠藤正樹（出雲市文化財課 主任）

高橋亜紀（同 臨時職員）

5. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S D—溝状遺構、S E—井戸、S X—不明遺構、P—ピット状遺構、S B—掘立柱建物跡

6. 本書で示した方位は真北を示す。

7. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

8. 本書掲載の遺物実測図及び写真撮影については、遠藤のほか、佐々木紀明、佐藤睦子、高橋亜紀、鶴山令子が行った。

9. 本書の執筆、編集は遠藤が行った。

10. 文化財調査コンサルタント株式会社 渡辺正巳氏からは玉稿を賜った。

11. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々に御指導、御協力を賜った。

西尾克己（島根県教育庁文化財課副主査）、守岡正司、松尾光晶（以上島根県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）、守岡利栄（島根県立博物館主任学芸員兼島根県古代文化センター主任研究員）、高塚久司、岡田光哲

12. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事していただいた。

鶴山令子、岩崎晶美、遠藤恭子、深津光子

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

目 次

本 文 目 次

第1章 調査に至る経緯	(遠藤)	1
第2章 位置と環境	(遠藤)	1
第3章 調査の概要	(遠藤)	4
1. 遺構と遺物	(遠藤)	4
a) 溝状遺構		
b) 堀立柱建物跡		
c) 棚列遺構		
d) 井戸状遺構		
e) その他の遺構		
2. 包含層出土遺物	(遠藤)	44
3. その他の出土遺物	(遠藤)	68
4.まとめ	(遠藤)	74
第4章 考察	(遠藤)	75
第5章 古志遺跡発掘調査に係る自然科学分析 … (渡辺正巳)		78

出土遺物觀察表

写真図版

抄 錄

挿 図 目 次

- | | | | |
|--------|---|---------|-------------------------|
| 第 1 図 | 古志遺跡周辺の遺跡 | 第 4 2 図 | S B 1 5 出土遺物 |
| 第 2 図 | 古志遺跡周辺図 | 第 4 3 図 | S B 1 6 遺構実測図 |
| 第 3 図 | 調査区全体図 1 (～第⑤層・上面) | 第 4 4 図 | S A 0 1 遺構実測図 |
| 第 4 図 | 調査区全体図 2 (第⑤～2層・上面～
第⑥層・上面) | 第 4 5 図 | S A 0 1 出土遺物 |
| 第 5 図 | 調査区全体図 3 (地山面) | 第 4 6 図 | S A 0 2 遺構実測図 |
| 第 6 図 | 南壁・西壁土層堆積状況 | 第 4 7 図 | S A 0 3 遺構実測図 |
| 第 7 図 | 北壁・東壁土層堆積状況 | 第 4 8 図 | S A 0 4 遺構実測図 |
| 第 8 図 | D ライン土層堆積状況 | 第 4 9 図 | S A 0 5 遺構実測図 |
| 第 9 図 | S D 0 2 · S D 0 1 · S D 0 6 · S
D 0 4 上層堆積状況 | 第 5 0 図 | S E 0 1 出土遺物 |
| 第 10 図 | S D 0 2 出土遺物 | 第 5 1 図 | S X 0 2 · S X 0 1 遺構実測図 |
| 第 11 図 | S D 0 1 出土遺物 | 第 5 2 図 | S X 0 4 出土遺物 |
| 第 12 図 | S D 0 6 出土遺物 | 第 5 3 図 | S X 0 5 出土遺物 |
| 第 13 図 | S D 0 3 遺構実測図 | 第 5 4 図 | 第②層出土遺物 |
| 第 14 図 | S D 0 3 出土遺物 1 | 第 5 5 図 | 第③層出土遺物 |
| 第 15 図 | S D 0 3 出土遺物 2 | 第 5 6 図 | 第④層出土遺物 |
| 第 16 図 | S D 0 3 出土遺物 3 | 第 5 7 図 | 第④～1層出土遺物 1 |
| 第 17 図 | S D 0 3 出土遺物 4 | 第 5 8 図 | 第④～1層出土遺物 2 |
| 第 18 図 | 大溝 0 1 出土遺物 | 第 5 9 図 | 第④～1層出土遺物 3 |
| 第 19 図 | S B 0 1 遺構実測図 | 第 6 0 図 | 第⑤層出土遺物 1 |
| 第 20 図 | S B 0 1 出土遺物 | 第 6 1 図 | 第⑤層出土遺物 2 |
| 第 21 図 | S B 0 2 遺構実測図 | 第 6 2 図 | 第⑤層出土遺物 3 |
| 第 22 図 | S B 0 3 遺構実測図 | 第 6 3 図 | 第⑤層出土遺物 4 |
| 第 23 図 | S B 0 4 遺構実測図 | 第 6 4 図 | 第⑤層出土遺物 5 |
| 第 24 図 | S B 0 4 出土遺物 | 第 6 5 図 | 第⑤～0層出土遺物 1 |
| 第 25 図 | S B 0 5 遺構実測図 | 第 6 6 図 | 第⑤～0層出土遺物 2 |
| 第 26 図 | S B 0 5 出土遺物 | 第 6 7 図 | 第⑤～1層出土遺物 |
| 第 27 図 | S B 0 6 遺構実測図 | 第 6 8 図 | 第⑤～2層出土遺物 |
| 第 28 図 | S B 0 6 出土遺物 | 第 6 9 図 | 第⑥層出土遺物 |
| 第 29 図 | S B 0 7 遺構実測図 | 第 7 0 図 | 北側排水路出土遺物 |
| 第 30 図 | S B 0 8 遺構実測図 | 第 7 1 図 | 東側排水路出土遺物 1 |
| 第 31 図 | S B 0 8 出土遺物 | 第 7 2 図 | 東側排水路出土遺物 2 |
| 第 32 図 | S B 0 9 遺構実測図 | 第 7 3 図 | 南側排水路出土遺物 |
| 第 33 図 | S B 1 0 遺構実測図 | 第 7 4 図 | 搅乱土出土遺物 |
| 第 34 図 | S B 1 1 遺構実測図 | 第 7 5 図 | 造成土出土遺物 |
| 第 35 図 | S B 1 1 出土遺物 | 第 7 6 図 | 暗渠排水出土遺物 |
| 第 36 図 | S B 1 2 遺構実測図 | 第 7 7 図 | 排土中出土遺物 |
| 第 37 図 | S B 1 2 出土遺物 | 第 7 8 図 | その他の出土遺物 |
| 第 38 図 | S B 1 3 遺構実測図 | 第 7 9 図 | 掘立柱建物平面プラン分布図 |
| 第 39 図 | S B 1 3 出土遺物 | 第 8 0 図 | 遺構主軸方向分布図 |
| 第 40 図 | S B 1 4 遺構実測図 | | |
| 第 41 図 | S B 1 5 遺構実測図 | | |
- 表 1 挖立柱建物平面プラン分布図
表 2 遺構主軸方向

第1章 調査に至る経緯

山雲市財政課（現：管財室）が計画する古志運動広場等整備事業予定地の遺跡の有無について照会を受けた出雲市文化財室（現：文化財課）は、平成14年10月23日に試掘調査を実施した。当地は周知の遺跡の範囲には含まれていなかったが、周知の遺跡である古志本郷遺跡や古志遺跡と隣接することから、調査前より遺跡の存在が推定された。

試掘調査の結果、遺構・遺物を確認し、遺跡の分布状況から、事業地内体育館予定地部分について、発掘調査が必要であることを同年10月24日付文書にて回答した。その後、市財政課は事業地内体育館予定地部分約1,620m²について、同年12月12日付文書で市文化財室に本調査の依頼をしたが、事業量から本年度は発掘調査の実施が不可能であったため、次年度事業として実施することとした。発掘調査に先立ち、翌平成15年3月3日に発掘の通知（文化財保護法第57条の3）、4月22日に発掘の報告（同法第58条の2）を提出し、5月3日から調査を実施している。調査は同年12月12日に終了した。

第2章 位置と環境

出雲平野は、山雲砂丘の内側の潟湖が斐伊川、神戸川の二大河川によって沖積され形成された日本海側屈指の沖積平野である。

出雲平野西部で集落が爆発的に営まれるのは弥生時代中期頃からであるが、平野北西端の菱根遺跡と平野西部の砂丘下にある上長浜貝塚が最も古く、縄文時代早期末の遺跡として知られる。その後も縄文時代前期末から中期にかけて上ヶ谷遺跡（斐川町）が知られるが、平野南部ではやや遅れ、縄文中期の土器が出土している三田谷Ⅲ遺跡が初源である。後・晩期になると平野縁辺部を中心に遺跡も増え、平野南西部に御領田遺跡、三部竹崎遺跡、南部に三田谷Ⅰ遺跡、築山遺跡、南東部に後谷遺跡（斐川町）、北西部に原山遺跡・出雲大社境内遺跡が出現するほか、平野中央部においても矢野遺跡、善行寺遺跡などの遺跡から、後・晩期の遺物が出土している。このように周辺地域からはいくつかの遺跡が知られているが、古志遺跡を含む古志遺跡群では、現在のところ縄文時代の遺物は出土していない。

弥生時代になると、前期に縄文後・晩期から継続する浅柄遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、欠野遺跡が引き続き展開する。古志遺跡群では古志本郷遺跡で前期の土器を含む溝が確認されており、居住の痕跡を若干伺い知ることができるものの、集落の展開はさらに遅れるものとみられる。中期になると、斐伊川・神戸川の氾濫による流路の変化や沖積作用によって形成された微高地に、広範囲にまとまった大規模集落が営まれるようになる。その中でも天神遺跡、古志本郷遺跡、下古志遺跡は、環濠の存在が明らかになっており、環濠集落としての大きな居住地が形成されていたと考えられている。古志遺跡群での集落の開始も中期以降である。その他では矢野遺跡、田畠遺跡、白枝荒神遺跡、知井宮多聞院遺跡、海上遺跡などが知られる。一方、北山山麓の扇状地に立地する青木遺跡からは、初源期の四隅突出型墳丘墓が検出され注目を集めている。後期になると、平野内一円に遺跡が広がり、小山遺跡、中

野美保遺跡、柳原西遺跡など、沖積地上にも集落が営まれる。墳墓では青木遺跡で四隅突出型墳丘墓が引き続き造墓されたほか、中野美保遺跡でも造墓された。一方、半野南側の丘陵上には西谷墳墓群が出現し、丘陵上でも四隅突出型墳丘墓が築造される。西谷3号墓ではその出土土器より吉備や北陸との交流があったことが指摘されている。三田谷I遺跡から出雲地方では珍しい方形周溝墓も検出されている。

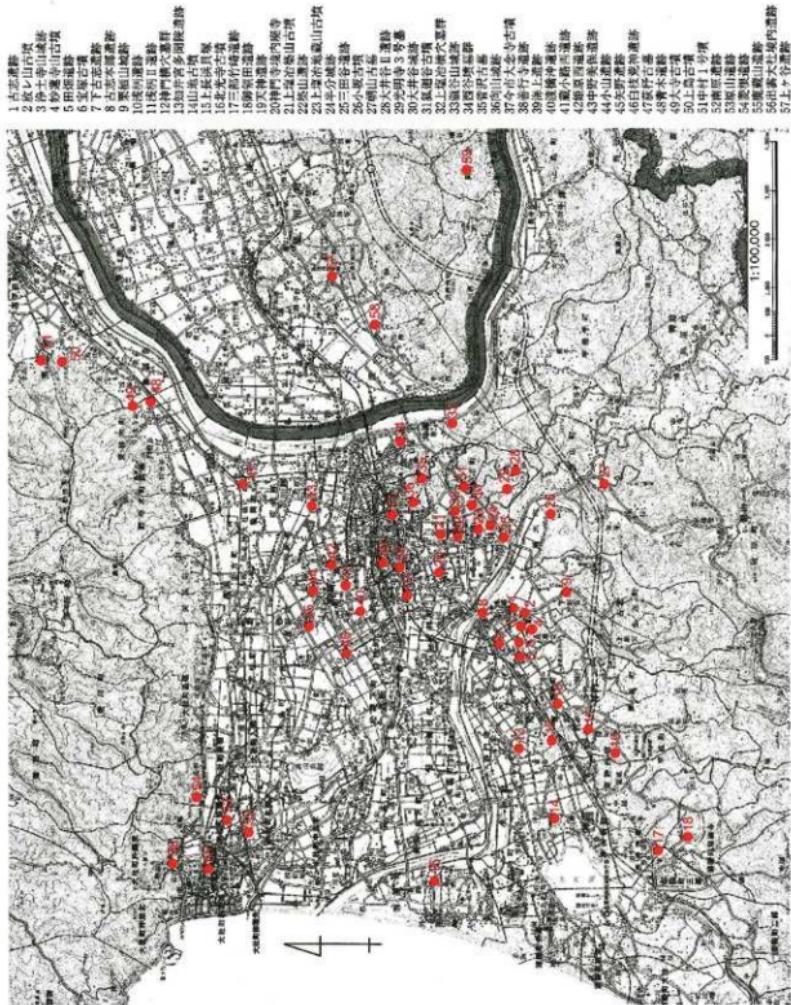
古墳時代になると、前期には半野の周辺に、筒形銅器や鏡をもつ山地古墳や県内最古の前方後円墳である大寺1号墳、粘土櫛が確認された浅柄II遺跡、西谷墳墓群の一角にある西谷7号墓が築造される。中期に入ても北光寺古墳、西谷15号墳、16号墳などが築造されるものの、古墳の数はあまり増加しない。後期に入ると多くの古墳が築造されるようになり、神戸川東岸に今市大念寺古墳、上塩治築山古墳、上塩治地蔵山古墳といった首長墓が連続して築造され、西岸では、放レ山古墳、妙蓮寺山古墳、宝塚古墳などが築造される。一方、北山から派生する扇状地には上塩治築山古墳と同時に中村1号墳が築造された。終末期になると徐々に古墳の数は減り、横穴墓の築造が主流となる。特に古墳時代後期より造られ始めた神戸川西岸の神門横穴墓群（約100穴）と東岸の上塩治横穴墓群（約180穴）は全国最大規模の横穴墓群で、終末期における2大墓域としての性格を持つと考えられる。上塩治横穴墓群の中には、金糸や装飾人刀を副葬する横穴墓も確認されている。しかし周辺では、三田谷2号墳・3号墳、光明寺4号墳、大井谷古墳、狐廻谷古墳といった後期から終末期にかけての古墳も確認されており、全ての古墳が横穴墓に取って替わられたわけではないようである。

古代になると、出雲平野には神門郡と出雲郡の2つの行政区画が定められた。この「郡」を統括していた官庁が「郡家」である。発掘調査の成果により、神門郡家は古志本郷遺跡、出雲郡家は後谷遺跡周辺に比定されている。古志本郷遺跡では大規模な掘立柱建物跡が検出されており、神門郡家の郡庁と考えられているほか、郡家の神戸川を挟んだ対岸にあたる三田谷I遺跡から、墨書き土器のほか「高岸神門」などの木簡、綠釉陶器などが出土し、神門郡の出先機関とみられている。一方、出雲郡の出先機関とみられる背木遺跡からは600点にも及ぶ多量の墨書き土器のほか、国内最古の神像、絵馬、壳田券木簡、墨書き土器などが発見されている。また平野北西部の鹿藏山遺跡からは、奈良三彩、綠釉陶器、腰帶金具、墨書き土器などが出土しており、官衙施設を含めた性格が考えられている。古代寺院では、733年勘定の『出雲國風土記』に記載される神門郡朝山郷新造院と出雲郡河内郷新造院が、それぞれ神門寺境内廃寺と天寺平廃寺（斐川町）に推定されている。平野南側の丘陵谷奥に所在する大井谷II遺跡では、遺跡を南北に横切る大溝から仏教関連遺物が出土しており、遺跡北側に所在する般若寺周辺に古代寺院の存在が考えられている。また、塩治地区及び朝山地区では、石製骨蔵器を持つ古墓で墳丘がある特異な構造を持つ光明寺3号墓が、古墳時代から奈良時代への火葬墓の過渡期の様相を示している。この地域では、県内で確認された石製骨蔵器5例のうち、菅沢古墓、朝山古墓、小坂古墳を含めた4例が確認されている。

中世には、出雲守護職の佐々木氏が塩治郷に守護所を置き、塩治地域が出雲国を中心とする。蔵小路西遺跡からは、朝山家惣領家の可能性が指摘されている館跡が検出されているほか、波橋沖遺跡、矢野遺跡からも館跡が確認されている。これらはそれぞれ12世紀後半～15世紀前半頃、13～14世紀頃、14～15世紀頃と考えられている。古志地区では、文献により古志氏の存在が知られているが、現在の

第1図

古志遺跡周辺の遺跡



ところ発掘調査で古志氏との関係が証明されている遺跡はない。古墓としては龍泉窯系青磁の優品が出土している萩原古墓が著名であるほか、姫原西遺跡からは木棺墓が検出されている。さらに社寺関連遺跡としては、出雲大社境内遺跡から巨大本殿遺構が確認されているほか、大井谷Ⅱ遺跡からは中世寺院跡が検出されており、全国的に珍しい瀬戸の灰釉台場が出土している。山城は市内の各所に点在しているが、向山城、大井谷城、半分城、瀧谷山城などがあり、なかでも向山城は、鎌倉時代の悲運の武将、塙治判官高貞の居城ともみられている。古志地区でも俗に古志三城といわれる淨土寺山城、栗栖山城などが築城された。

近世に入ると、松江藩の土地政策により斐伊川の河川改修が実施された。網状河川であった斐伊川は、この改修により…本の大河川に統合され、出雲平野の新田開発が進むことになる。斐伊川西岸には来原岩橋、間府岩橋が開削され、物資輸送や農業用水の確保に利用された。このような松江藩の水利政策は、出雲平野を有数の穀倉地帯にした。平野中央部の小山遺跡（第2地点）では、近世の豪農成相家の館跡が調査されている。

一方、奥田儀の宮本の地では、田儀櫻井家が数百人の従事者を抱えて製鉄業を経営し、大集落を形成した。これらの遺跡は当時の痕跡を良好に残しており現在注目されている。

第3章 調査の概要

今回の発掘調査の対象となった古志遺跡は、神戸川西岸の水田中に位置している。付近は古志本郷遺跡、下古志遺跡、放れ山古墳など、遺跡の密集地帯として知られており、出雲平野の遺跡を考える上で重要な要素となっている。

調査は平成15年5月19日から本格的に作業員を導入して発掘調査を実施し、同年12月22日をもって現地調査を終了した。調査結果については下記のとおりである。

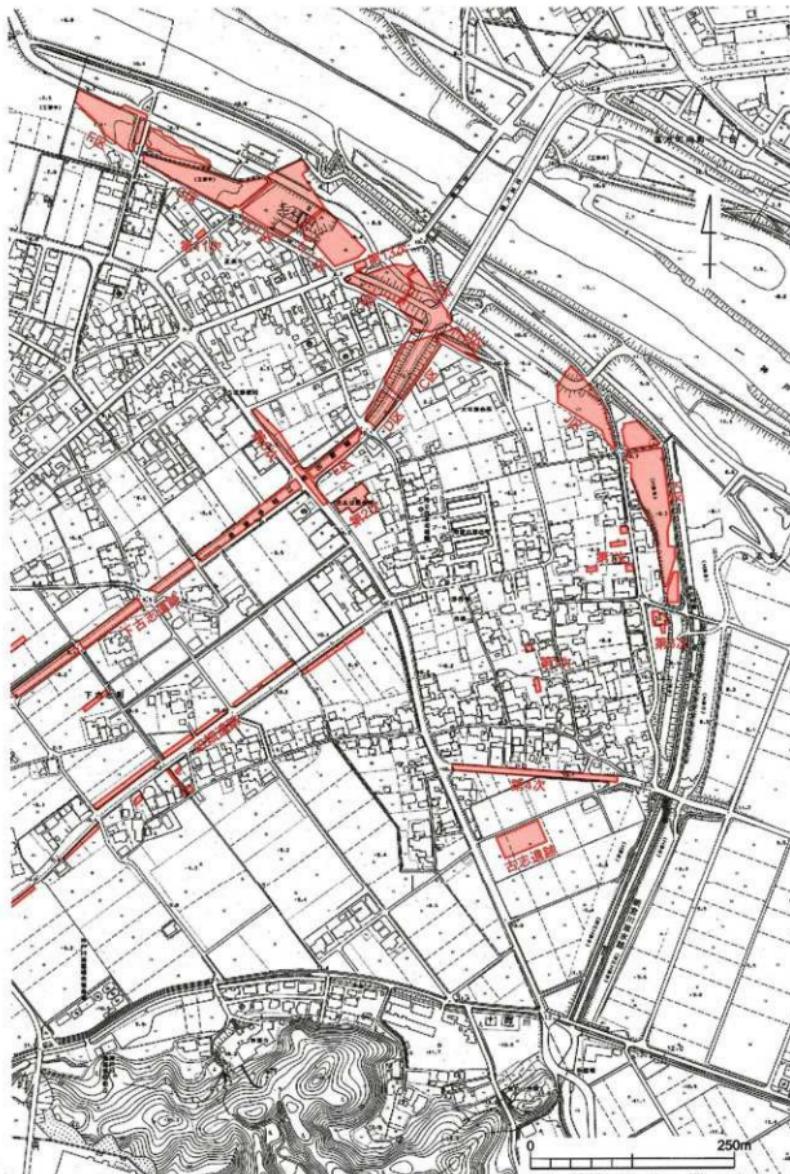
調査区は東西約54m、南北約30mの約1620m²で平面長方形を呈す。調査は表土を30~40cm重機掘削した後、堆積土を手掘りにより徐々に下げ実施した。古地形が南西から北東に下がるため、東側では土層が何層も堆積するが、西に行くほど少くなり、最も標高の高い南西端では、造成土直下が地山面となる。基本的な層序は第①~③層が耕作土及び造成土、第④層が近世以降、第④~1層が15、16世紀、第⑤層が9世紀初、第⑤~2層が8世紀、第⑥層が7世紀後半と推定される。このうち遺構面が確認されたのは、第④層上面、第⑤層上面、第⑤~2層及び第⑥層上面、地山直上の4面で、第⑤~2層及び第⑥層上面からは16棟の掘立柱建物跡や溝など多数の遺構を検出している。

1. 遺構と遺物

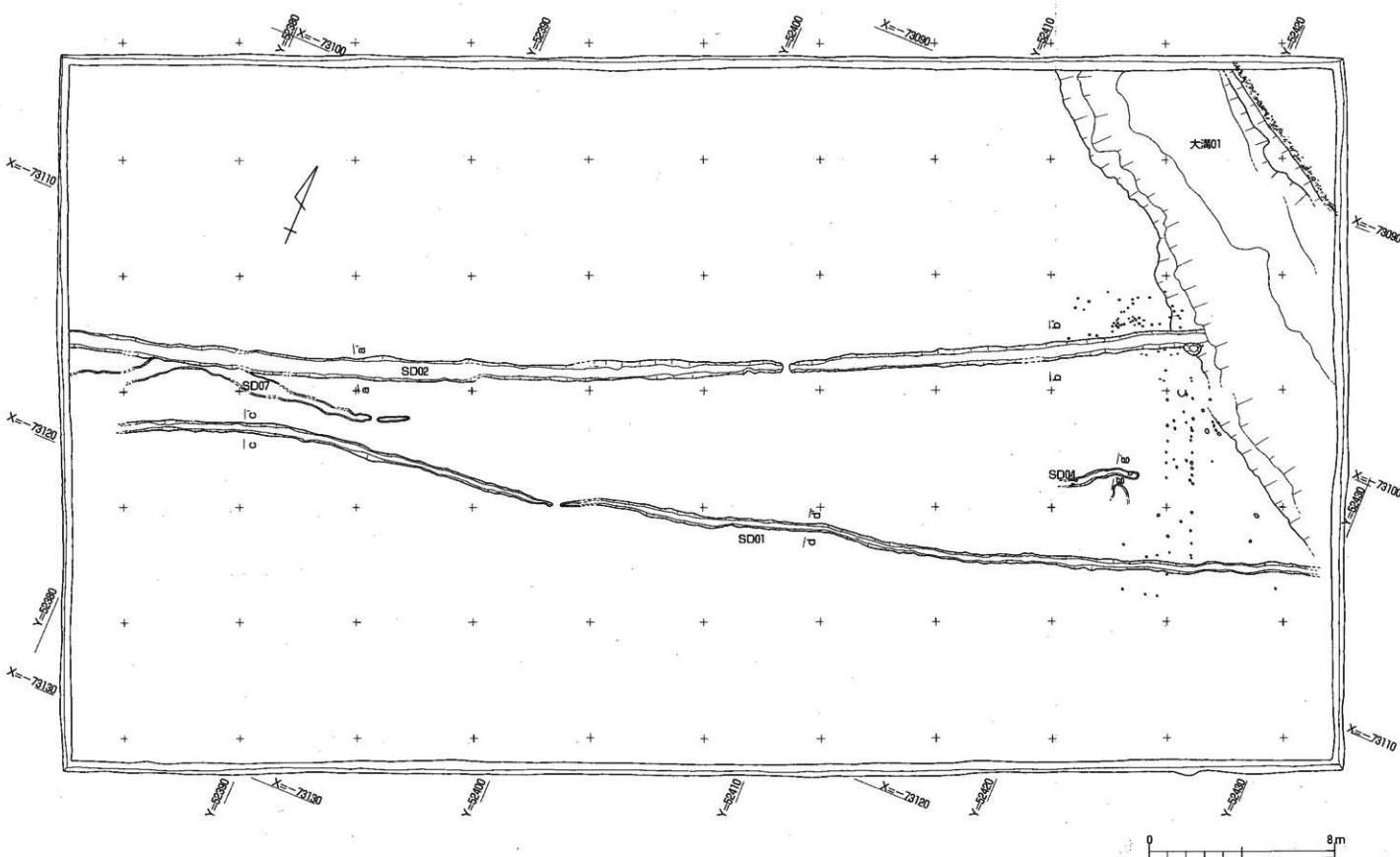
a. 溝状遺構

S D 0 2 (第3, 9, 10図)

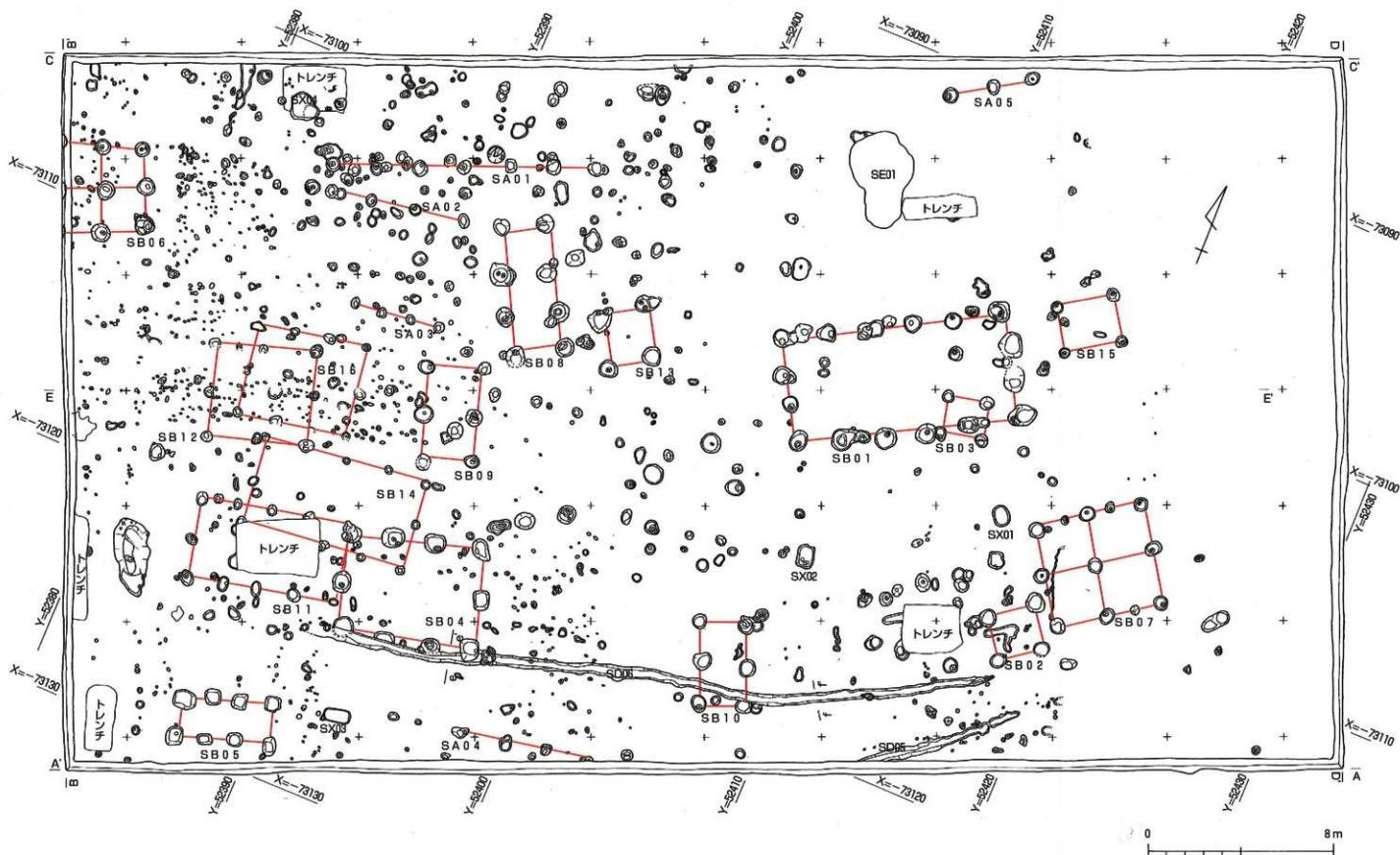
第④層上面で検出した遺構で、長さ約49.3m以上、幅約0.9mを測る。遺構内出土遺物と遺構が掘り



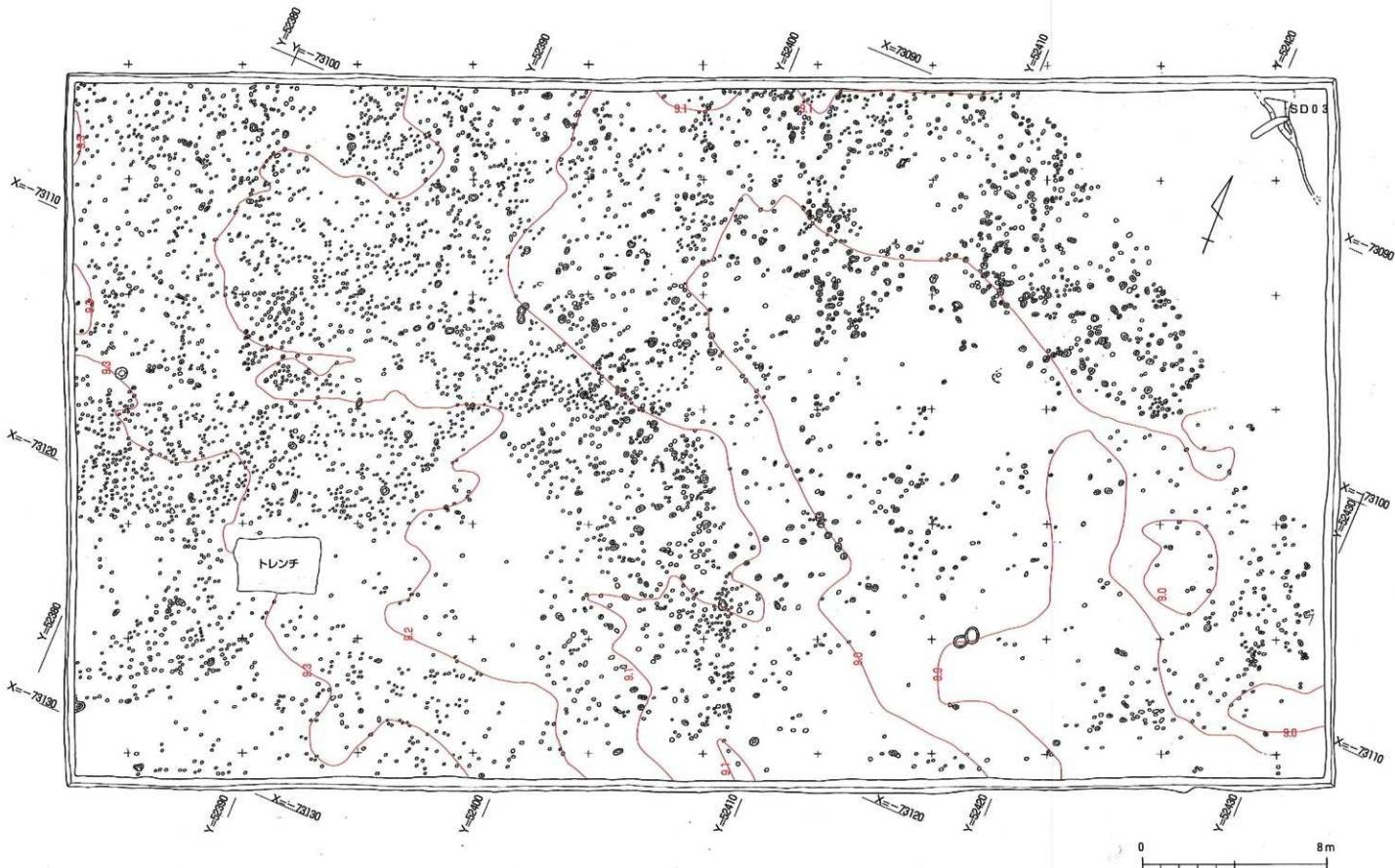
第2図 古志遺跡周辺図 (S=1/6000)



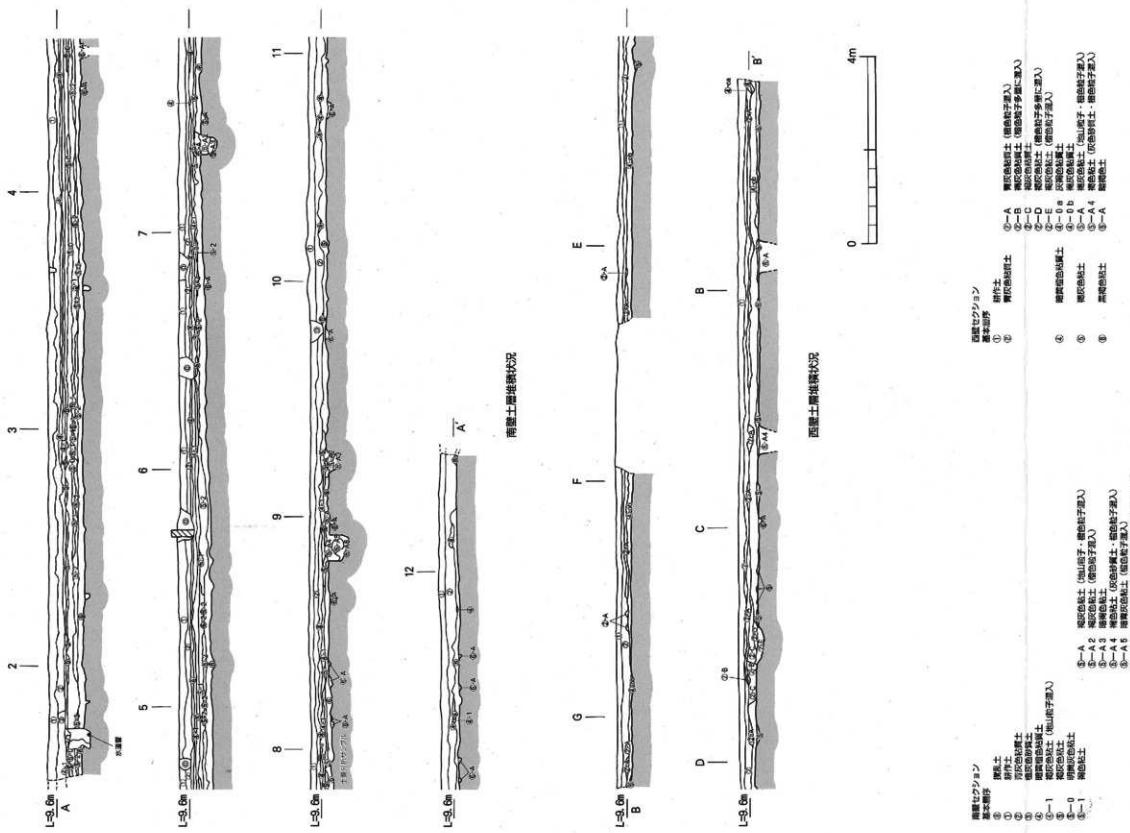
第3図 調査区全体図1 (~第⑤層上面) (S=1/160)



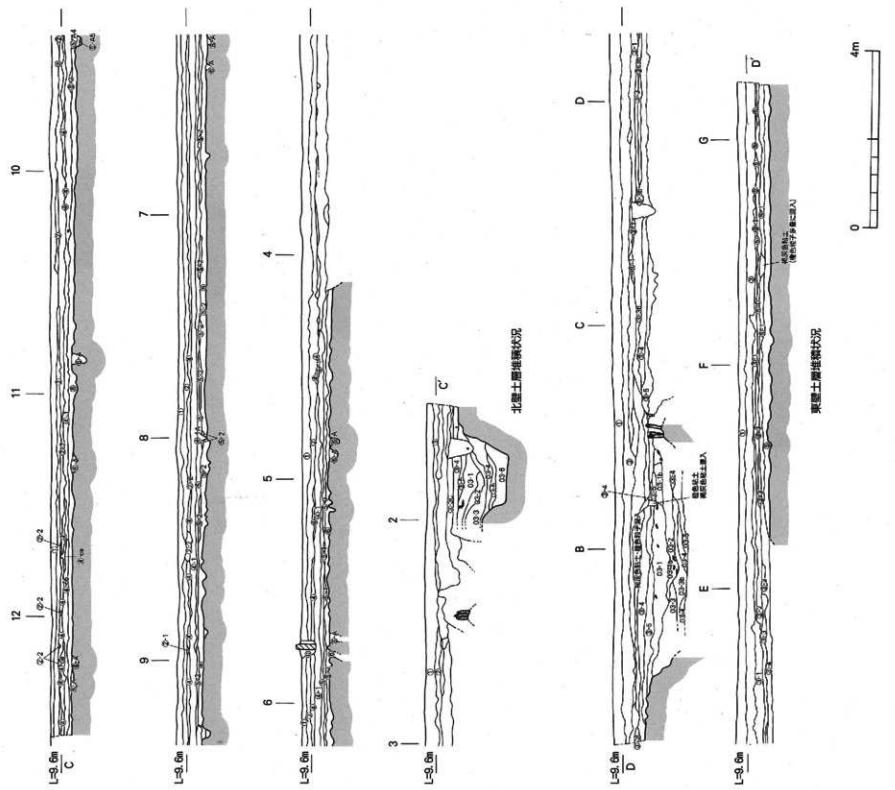
第4図 調査区全体図2 (第⑥-2層上面～第⑥層上面) (S=1/160)



第5図 調査区全体図3（地山面）(S=1/160)

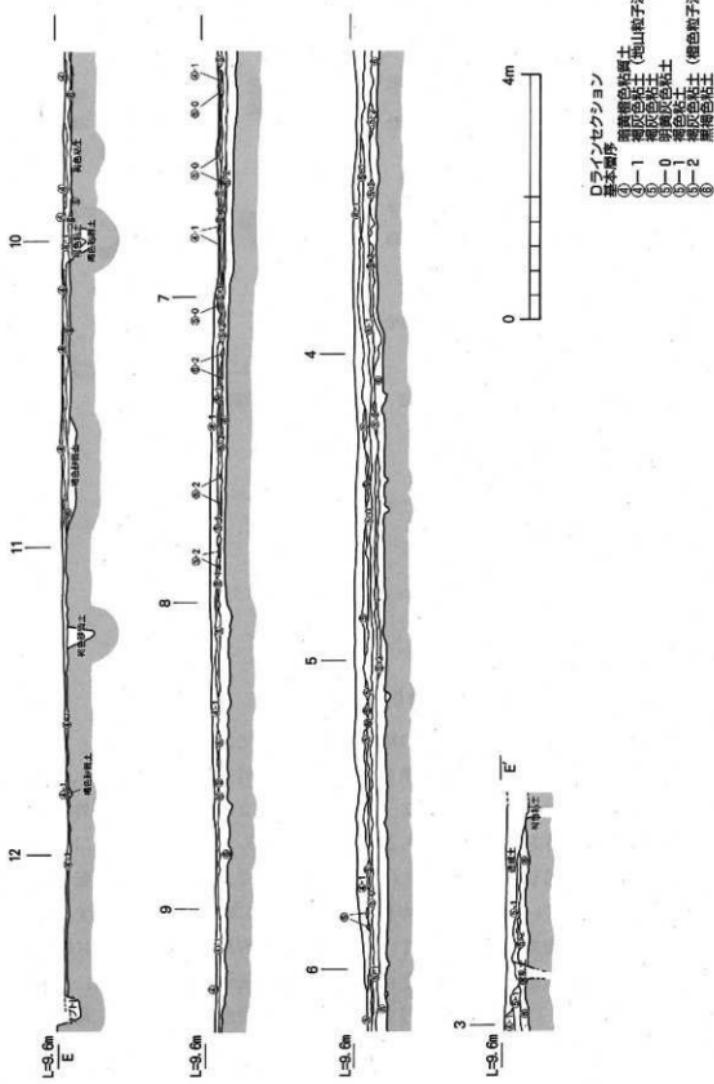


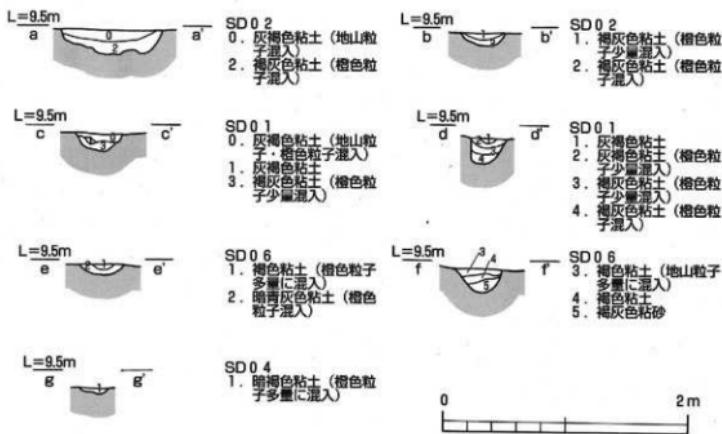
第6圖 南壁・西壁・屋根椎種状況 (S=1/80)



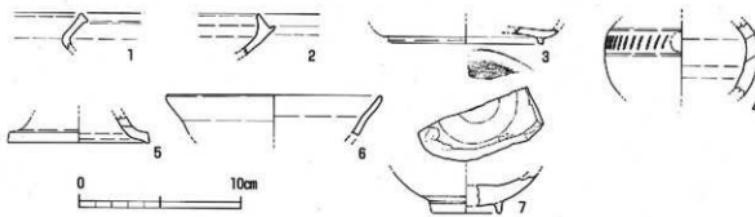
北盤土層堆積狀況		東盤土層堆積狀況	
0-1	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-1	褐色砂質土 (褐色沙子混入)
0-2	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-2	褐色砂質土 (褐色沙子混入)
0-3	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-3	褐色砂質土 (褐色沙子混入)
0-4	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-4	褐色砂質土 (褐色沙子混入)
0-5	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-5	褐色砂質土 (褐色沙子混入)
0-6	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-6	褐色砂質土 (褐色沙子混入)
0-7	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-7	褐色砂質土 (褐色沙子混入)
0-8	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-8	褐色砂質土 (褐色沙子混入)
0-9	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-9	褐色砂質土 (褐色沙子混入)
0-10	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-10	褐色砂質土 (褐色沙子混入)
0-11	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-11	褐色砂質土 (褐色沙子混入)
0-12	褐色砂質土 (褐色沙子混入)	0-12	褐色砂質土 (褐色沙子混入)

第8図 Dライン土層堆積状況 (S=1/80)





第9図 SD 02・SD 01・SD 06・SD 04 土層堆積状況 (S=1/40)



第10図 SD 02 出土遺物

込まれている層（第④層）の出土遺物から、造構の時期は近世以降と考えられる。

第10図1は弥生土器壺で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を両側に肥厚させ2条の擬凹線を施している。2～5は須恵器で、2は坏身である。内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を尖らせている。一方、口縁部内側にはかえりが施され、かえり端部も尖り気味に仕上げている。3は坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部に付け高台を施している。4は瓶の体部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。外面には2条の沈線を施し、内側に刺突文、穿孔を施している。5は高坏の脚部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。裾部は外反し端部内側を外方に突出させる。端部は尖り気味に仕上げている。6は陶器壺で内外面ともに施釉している。口縁部は器壁中程で外側に屈曲した後内湾気味に伸び、端部は尖り気味に仕上げる。7は肥前系染付碗で、内外面ともに施釉し、高台外側周辺に染付を施す。器壁は内湾しながら立ち上がり、内面見込には蛇ノ目釉ハギを残す。高台内側は外側よりも厚く仕上げ、高台疊付は露胎としている。

SD 01 (第3, 9, 11図)

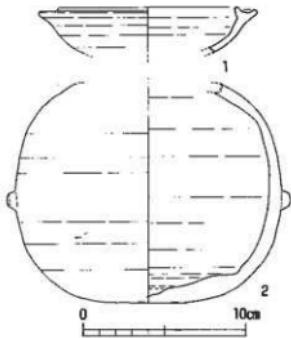
第⑤層上面で検出した遺構で、少量の土器片しか出土しないため詳細は不明であるが、遺構面直上の包含層（第④—1層）と遺構が掘り込まれている層（第⑤層）の出土遺物から、遺構の時期は9世紀初～15、16世紀の間と考えられる。

第11図1, 2は須恵器である。1は壺身で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がりた後外傾し、端部を丸く仕上げる。一方、口縁部内側には小型のかえりが施され、かえり端部を尖り気味に仕上げている。2は瓶で、体部内面及び体部外面上部に回転ナデ調整、体部外下部には回転ヘラ削り調整を施し、底部は回転ヘラ切り調整または回転ヘラケズリ調整の後、ナデ調整を施している。体部中程では把手が珠文状に形骸化している。

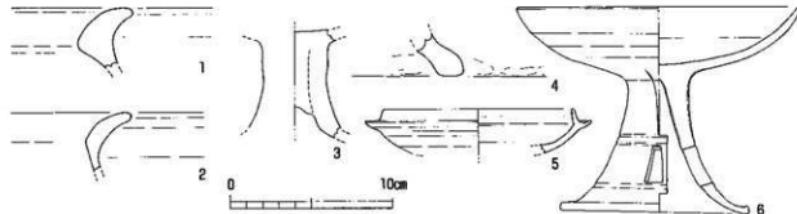
SD 06 (第4, 9, 12図)

第⑤—2層上面で検出した遺構で、長さ約29.5m以上、幅約0.4mを測る。遺構内出土遺物及び遺構面直上の包含層（第⑤層）と遺構が掘り込まれている層（第⑤—2層）の出土遺物から、遺構の時期は8世紀～9世紀初の間と考えられる。

第12図1～4は土師器である。1, 2は壺で、口縁部内外面にナデ調整を施し、体部内面にヘラケズリ調整を施す。口縁部は1, 2ともに外反しながら立ち上がり、端部は1は丸く、2は尖り気味に仕上げている。3は高壺で、風化が著しいため調整は不明である。器底部に円盤を充填している。4は上製支脚の脚部である。内面にはヘラケズリ調整、外面にはナデ調整及び指頭圧痕を施している。5, 6は須恵器である。5は壺身で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部外面に回転ヘラ切り調整または回転ヘラケズリ調整を施す。口縁部は内湾気味に伸びた後外傾し、端部を尖らせていく。一方、口縁部内側にはかえりが施され内傾している。かえり端部は尖らせている。6は高壺で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。脚部には2条の沈線を挟んで、2段2方向の透かしが穿孔され、上段透かしは線状、下段透かしは台形状を呈す。また下段透かし下方に1条の沈線が施されている。脚部の立ち上がりは裾部で外反し、端部をやや肥厚させている。



第11図 SD 01出土遺物



第12図 SD 06出土遺物

S D 0 3 (第13~17図)

調査区の北東角で確認した遺構で、7世紀前半までの須恵器・土師器が多量に出土した。土地改良で地表面まで搅乱されており、遺構上面は削平されているものと推定される。他の遺構よりもやや時期が古いと考えられる。

第14図1は弥生土器で、内外面ともに風化が著しく調整不明である。器壁は外方に直線的に立ち上がり。2~11は土師器壺である。2, 3は口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。体部外面は風化が著しく調整不明である。口縁部は外反しながら立ち上がり、2は端部を丸く、3は端部を尖り気味に仕上げている。4は口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖らせている。5は口縁部内外面にナデ調整を施した後、口縁部外面にハケ目調整を施す。体部は内面にヘラケズリ調整、

外面にハケ目調整を施している。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。6, 8~11は口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。6は口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げている。8は口縁部は外方に直線的に立ち上がった後やや外傾する。端部は丸く仕上げている。9は口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。10は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。頸部に粘土の接合痕が残る。11は口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げている。7は風化が著しいが、口縁部外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。口縁部内面にはハケ目調整を施している可能性がある。体部外面は風化のため調整不明である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖らせている。

第15図1~15, 17は土師器壺である。1~4, 6~13, 15は口縁部内外面ともにナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。1は口縁部は外方に直線的に立ち上がった後外傾する。端部は丸く仕上げている。2は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖らせている。3は口縁部は外傾した後内湾気味に立ち上がる。端部は尖り気味に仕上げている。4は口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。口縁部外面及び体部外面に多量の煤が付着する。6は頸部外面及び肩部外面の間に界線が施されている。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を尖らせ

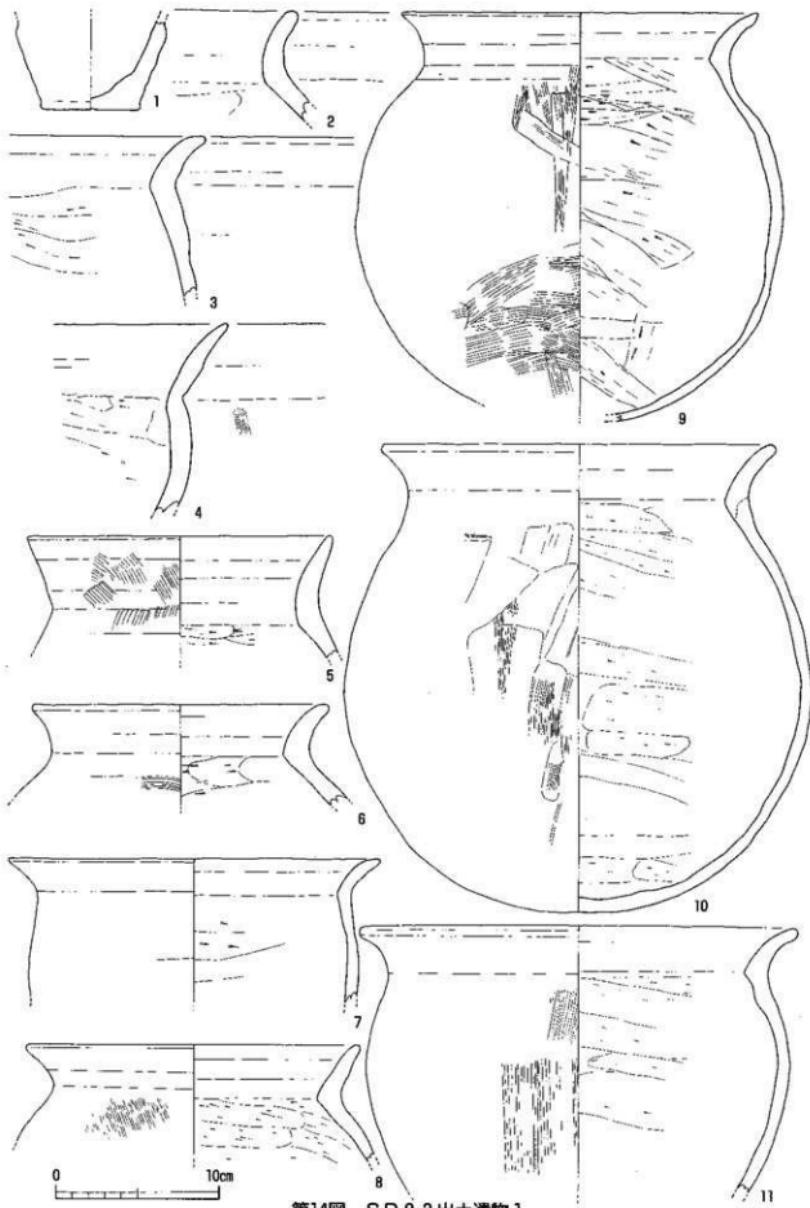


第13図 SD 0 3 遺構実測図 (S=1/40)

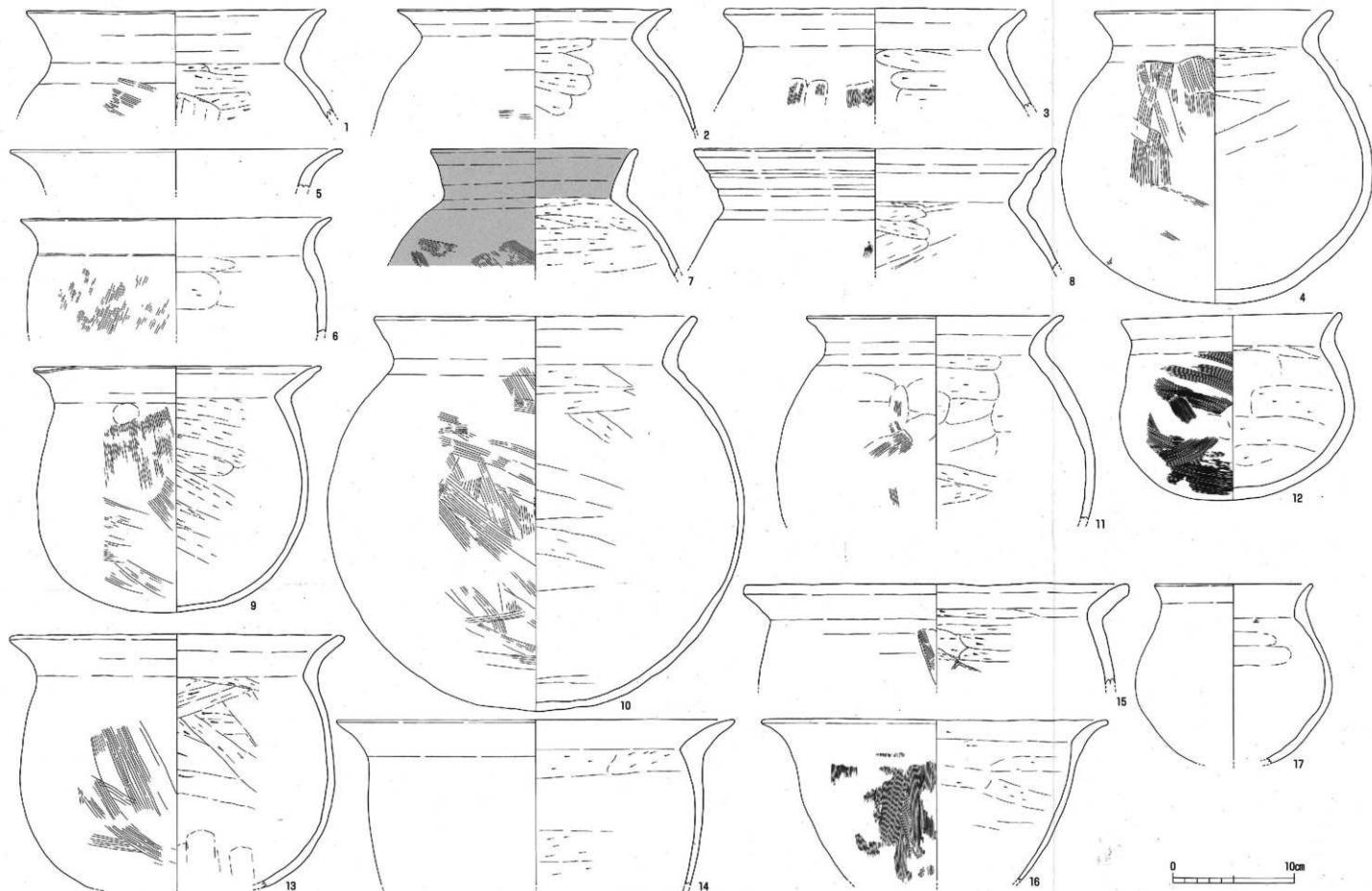
ている。7は口縁部は外方に直線的に立ち上がりやや外傾する。端部は丸く仕上げている。口縁部内外面及び体部外面に赤彩が施されている。8は口縁部外面のナデ調整が粗い。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味にしている。9は口縁部は外方に直線的に立ち上がりやや外傾する。端部は尖り気味にしている。10は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。11は口縁部は外反しながら立ち上がった後、外方に直線的に立ち上がる。端部は尖らせている。12は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。13は口縁部は外反しながら立ち上がった後、外方に直線的に立ち上がる。端部は丸く仕上げている。口縁部外面及び体部外面に煤が付着している。15は口縁部は外方に直線的に立ち上がりやや外傾する。端部には平坦気味な面を作っている。5は頬の可能性もある。口縁部は外面ともにナデ調整を施し、外反気味に立ち上がる。端部は尖り気味に仕上げている。14、17は口縁部内外面ともにナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。体部外面は風化が著しく調整不明である。14は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。17は小型の壺で、器壁の厚さも薄い。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。16は土師器瓶で、口縁部内外面ともにナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。

第16図1～11は上師器で、1～8は竈である。1～3は口縁部及び庇で、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。1は庇内外面にはヘラミガキ調整を施した後、指頭圧痕を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。一方、庇は口縁部下でやや反り上がり、端部は丸く仕上げている。2、3は庇内外面にナデ調整を施した後、指頭圧痕を施す。庇内面で一部にヘラケズリ調整が施されている。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げる。一方、庇は口縁部下で2は外方に直線的に、3はやや反り上がり、端部は丸く仕上げている。2は体部外面にハケ目調整を施す。4～6は脚部である。4は炊口の正面右袖部分の破片で、外面に庇の貼付痕が残る。内面及び底部にはヘラケズリ調整、外面にはナデ調整が施されている。器壁は内湾気味に伸びた後、外方に直線的に広がり、端部をやや肥厚させて平坦面を作っている。5、6は内面にヘラケズリ調整、外面にナデ調整を施し、底部平坦面に整形台の痕跡が転写されている。5は器壁の広がりは内湾気味であるが、裾部で厚く肥厚するため、外見は外反気味である。6は器壁の広がりは内湾気味である。7は口縁部内外面にナデ調整を施した後、内面下にハケ目調整を施す。一方、体部は内面にヘラケズリ調整を施すが、外面は風化が著しく調整不明である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。8は口縁部内外面、庇内外面、体部外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、炊口上部内側にハケ目調整を施す。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。一方、庇は口縁部下で外反しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。9は壺で、内面にナデ調整及び指頭圧痕、外面にハケ目調整及び指頭圧痕を施し、口縁部をナデ消している。立ち上がりは口唇部で外反気味に立ち上がった後屈曲する。端部は丸く仕上げている。10、11は高坏脚部である。10は外面は風化が著しいが、内面はヘラケズリ調整を施し、裾部内外面をナデ調整している。裾部は外反気味に広がり、端部は尖り気味にしている。11は内外面ともにナデ調整を施す。脚部の広がりは外反後外反気味となり、端部には平坦気味な面が作られる。裾部外面に1条の稜が施されている。

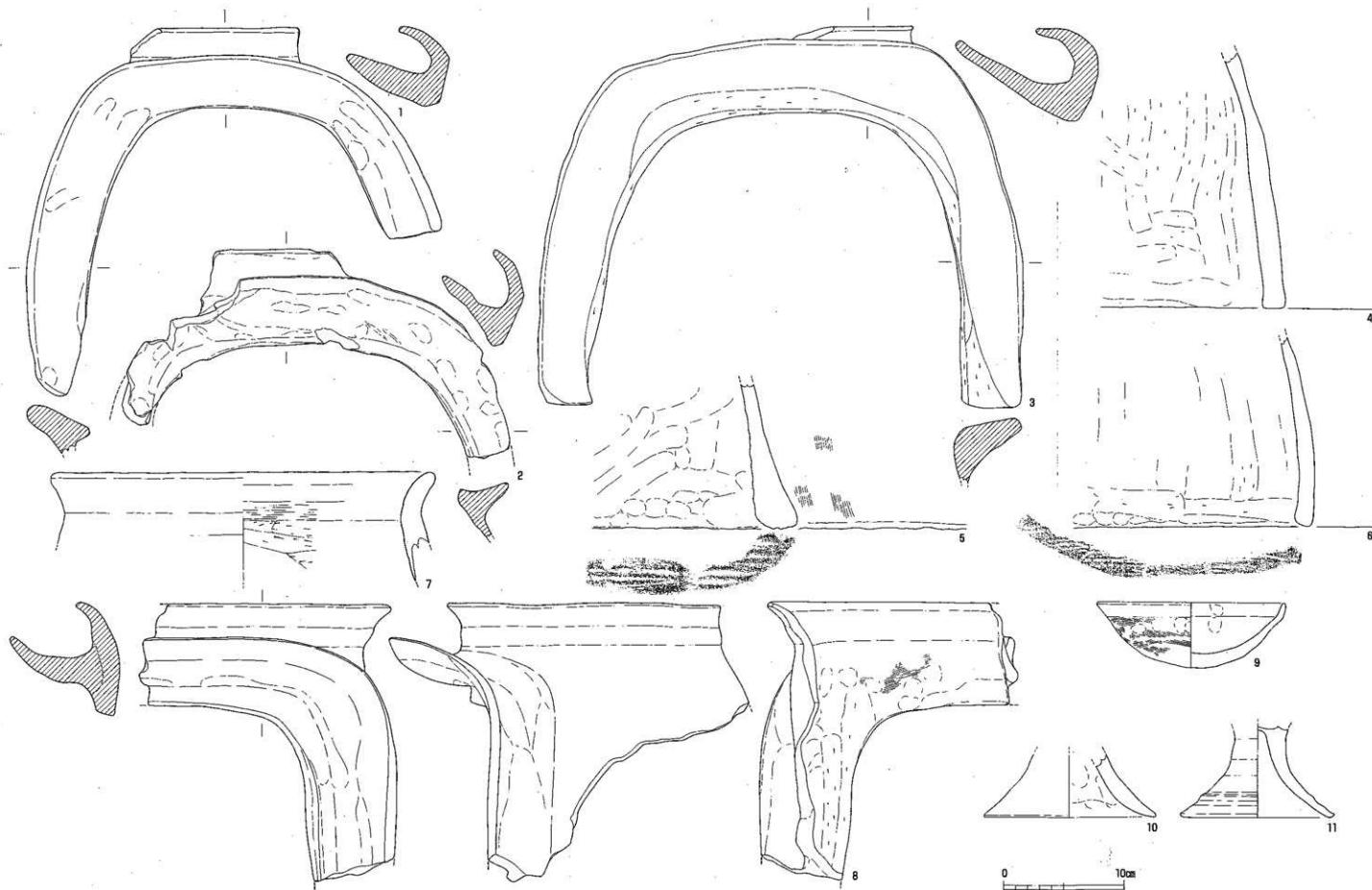
第17図1～9は上師器である。1～4は壺で、1は体部内面にヘラケズリ調整、体部外面及び裾部



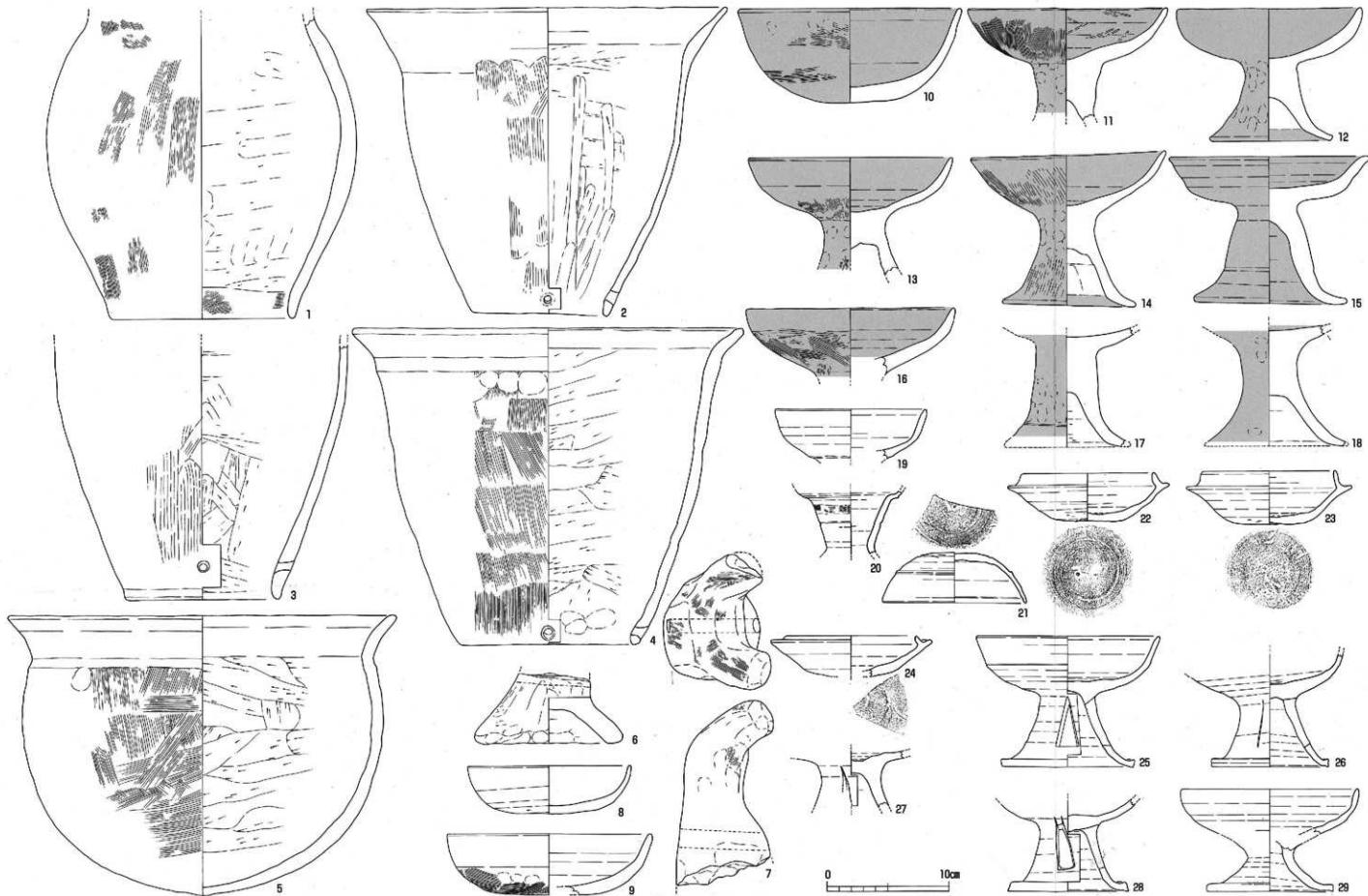
第14図 SD 03 出土遺物 1



第15図 SD 03出土遺物



第16図 SD 03出土遺物 3



第17図 SD 03出土遺物 4

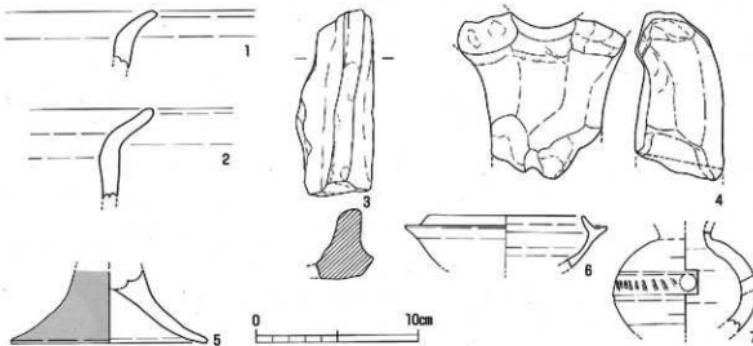
内面にハケ目調整を施す。器壁は肩部から内湾しながら伸びた後、外反気味となり、端部を丸く仕上げている。裾部外面は赤焼けしている。2は口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げる。一方、裾部は内側に直線的に伸び、端部は丸く仕上げている。3は体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施した後、裾部内外面にナデ調整を施す。器壁は体部から内側に直線的に伸び、端部で下方に屈曲する。端部は丸く仕上げている。2、3は裾部2方向に穿孔が施されている。4は口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。また頸部下外面及び裾部内面に指頭圧痕が残る。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。一方、裾部は内湾気味に伸び、端部は尖り気味に仕上げている。裾部には穿孔が施されている。5は壺で、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。また頸部下外面に指頭圧痕が残る。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げている。6、7は土製支脚である。6は脚部内面にヘラケズリ調整、外面にヘラミガキ調整及び指頭圧痕を施す。穿孔は貫通している。裾部は外反気味に広がり、端部に平坦気味な面を作っている。7は外面にヘラミガキ調整及びハケ目調整を施す。穿孔は貫通する。壺形土器を受ける突起を2方向に作っている。8、9は壺である。8は口縁部内外面及び内面見込に回転ナデ調整、底部に回転ヘラケズリ調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がりやや外形する。端部は尖り気味に仕上げている。9は外面にハケ目調整を施した後、指頭圧痕を施す。口縁部内外面には回転ナデ調整を施し、内面見込にナデ調整を施している。口縁部は器壁中程から外方に直線的に立ち上がる。端部は丸く仕上げている。10~18は赤彩土器である。10は壺で、内面はナデ調整を施した後暗文を施している可能性がある。外面はハケ目調整の後指頭圧痕を施し、口縁部内外面にナデ調整を施す。器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反気味に伸びる。端部は丸く仕上げている。内外面に赤彩を施す。11~18は高壺である。11は器部内面にナデ調整及びヘラミガキ調整、器部外面にハケ目調整、脚部内面にヘラケズリ調整、脚部外面にヘラミガキ調整及び指頭圧痕を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げる。器部内面見込中央は大きく凹んでいる。脚部は裾部で外方に伸びる。器部内外面及び脚部外面に赤彩を施す。12は器部内外面ともに風化が著しいが、口縁部内外面にはナデ調整を施していると考えられる。脚部も風化が著しいが、外面に指頭圧痕が残り、裾部内外面はナデ調整を施す。脚部内面はヘラケズリ調整されている。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。脚部は裾部で外反し、端部に平坦気味な面を作っている。器部・裾部内外面及び脚柱部外面に赤彩を施す。13は口縁部内外面及び器部内面見込にナデ調整、器部外面及び脚部外面にハケ目調整及び指頭圧痕を施す。器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内湾気味となる。端部は丸く仕上げている。脚部は外反気味に広がる。器部内外面及び脚部外面に赤彩を施す。14は器部内面にナデ調整、器部外面にハケ目調整を施す。脚部は外面上部にナデ調整及び指頭圧痕、下部にハケ目調整及びナデ調整を施し、裾部内外面にナデ調整、脚部内面にヘラケズリ調整を施している。口縁部は器部中程で内湾した後、外反気味に立ち上がる。端部は丸く仕上げている。一方、脚部は裾部で外反気味に広がり、端部は丸く仕上げる。器部・裾部内外面及び脚柱部外面に赤彩を施す。15は器部内外面、脚部内面、裾部内外面にナデ調整を施し、脚部外面にハケ目調整を施している可能性がある。口縁部は器部中程で内湾した後、外反気味に立ち

上がり、端部を尖り気味に仕上げる。脚部は器部との接合部を凹むほどナデ上げ、内湾気味に広がる。1条の沈線を施した後、裾部は内湾しながら広がる。端部は尖り気味にしている。全面に赤彩を施す。16は口縁部内外面及び内面見込にナデ調整、器部外面にハケ目調整及び指頭圧痕を施す。口縁部は器部中程で内湾した後、外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。器部内外面に赤彩を施す。17は風化のため器部の調整が不明で、脚部も外面は風化が著しいが、指頭圧痕が残る。脚部内面にヘラケズリ調整、裾部内外面にナデ調整が施されている。器壁は内湾気味に立ち上がり、脚部は裾部で外反しながら広がる。裾部外面に1条の沈線が施されている。器部外面及び脚部外面に赤彩を残す。18は器部内面見込にナデ調整またはヘラミガキ調整を施す。脚部は内面にヘラケズリ調整、外面にヘラミガキ調整及び指頭圧痕を施し、裾部をナデ調整している。脚部の広がりは外反しながら広がる。器部内外面及び脚部外面に赤彩を残す。19~29は須恵器である。19は腹または高坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、内面にはナデ調整も残る。口縁部は器壁中程で屈曲し、外方に直線的に立ち上がる。端部は尖り気味に仕上げている。外面にヘラ状工具痕を残す。20は腹で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、頸部上に波状文及び1条の沈線を施す。口縁部は外反しながら立ち上がり、1条の沈線を施して内湾気味となる。21は坏蓋で、口縁部内外面及び天井部内面に回転ナデ調整を施し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。口縁部は天井部から内湾しながら伸びた後、外方に直線的に伸びる。端部は尖り気味で、端部内側には1条の沈線を施す。肩部外面に1条の稜を施している。22~24は坏身である。22、23は口縁部内外面に回転ナデ調整、内面見込にナデ調整、底部外面に回転ヘラ切り調整を施す。22は口縁部は内湾気味に立ち上がり、外反気味となる。端部は尖り気味に仕上げる。一方、かえりは内側に伸びた後、上方にやや反り上がる。端部は尖り気味にしている。23は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。一方、かえりは内側に伸びた後反り上がり、やや内側に直線的に立ち上がる。24は口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、やや外傾する。端部は丸く仕上げている。一方、かえりは小型のかえりがやや反り上がり気味に付く。端部は尖り気味にしている。25~29は高坏である。25、26、28は器部内外面及び脚部内外面に回転ナデ調整を施し、器部内面見込にはナデ調整も施している。25は口縁部は器部外面中程に1条の沈線を施し、外方に直線的に立ち上がる。端部は尖り気味にしている。脚部は裾部で外反しながら広がり、上端部を拡張させて平坦面を作っている。脚部2方向に三角透かしを施す。26は器壁は内湾気味に立ち上がる。脚部は外反気味に広がり、端部は両端部を拡張させて平坦面を作っている。脚部2方向に線状透かしを施す。28は器壁は内湾気味に立ち上がる。脚部は裾部で外反し、両端部を拡張させて平坦面を作っている。下端部の突出は外方に発達しており、端部は尖り気味にしている。脚部2方向に台形透かしを施す。27は器部内外面に回転ナデ調整を施し、内面見込にはナデ調整も施す。器壁は外方に直線的に立ち上がり、脚部は外反気味に広がる。脚部3方向に透かしが施されている。29は胎土が瓦質的で、外面炭素吹付の状態となっていることから、瓦質土器の可能性もある。調整は口縁部内外面及び脚部内外面に回転ナデ調整を施す。裾部外面に飛鉈状の痕跡が残る。一方、裾部内面には製作者の指紋が残っている。器壁の立ち上がりは、内湾気味に立ち上がった後屈曲し、やや外方に直線的に立ち上がる。端部は尖り気味に仕上げている。脚部は外反しながら広がり、下端部をやや拡張させて平坦面を作っている。

大溝01（第3、18図）

縦長約25.6m以上、横幅約10.4m、深さ約0.4mを測る溝状遺構で、堆積状況から近世以降の遺構である可能性が高い。

第18図1～4は土師器である。1、2はともに壺または瓶で、口縁部にはナデ調整を施す。口縁部は1は外反気味に、2は内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げる。1、2ともに風化が著しいが、2は体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整が残る。3は竈の底の直立部である。4は土製支脚で、外面をヘラミガキ調整し穿孔している。5は赤彩土器で、外面及び裾部内外面にナデ調整を施し、外面に赤彩が少量残る。脚部は外方に直線的に伸びた後、裾部でやや外傾している。6、7は須恵器である。6は壺身で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾気味に立ち上がった後外傾し、端部を尖り気味に仕上げる。一方、口縁部内側にはかえりが施され、かえり端部は尖り気味にしている。7は竈で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、体部には穿孔を施す。体部外面の2条の沈線の間に刺突文を施している。



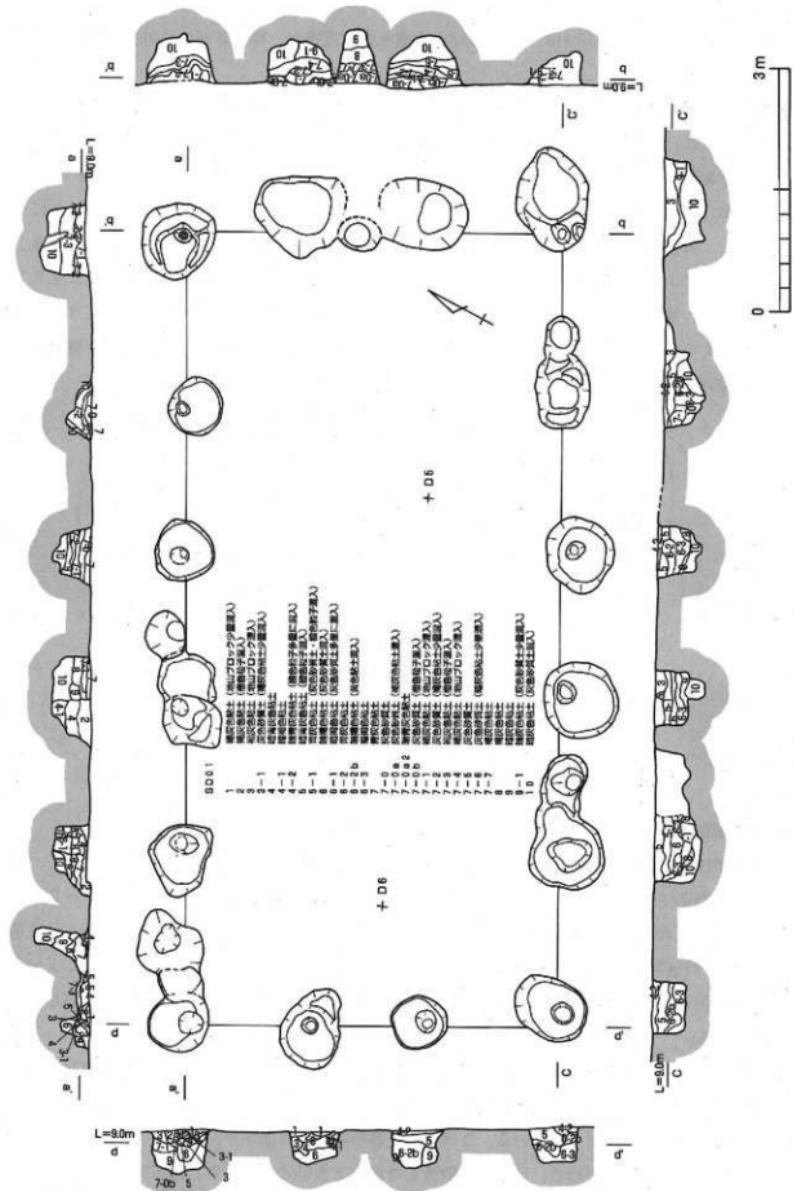
第18図 大溝01出土遺物

b. 掘立柱建物跡

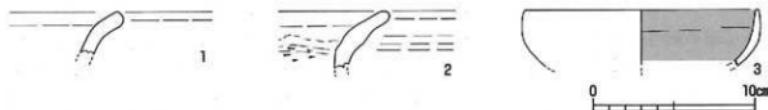
S B 01（第19、20図）

5×3間の掘立柱建物跡で、桁行約9.6m×梁間約4.4mを測る。軸の方向は南北でN~28°~Wである。第⑤-2層上面で検出しておらず、遺構面直上の包含層（第5層）と遺構が掘り込まれている層（第⑤-2層）の遺物から8～9世紀初頃の間と考えられるが、柱穴より移動式竈片が出土していることから8世紀前半頃と推定される。S B 08（N~27°~W）、S A 05（N~60°~E）とほぼ平行・垂直関係にある。

第20図1、2は土師器口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。1は口縁部の立ち上がりは外傾し端部を丸く仕上げている。2は一部残存する体部内面にヘラケズリを施している。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。3は赤彩土器の壺または高壺で、内外面ともにナデ調整を施している。内面には赤彩が残る。口縁部は内湾しながら上方に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。



第19図 SB01 道構実測図 (S=1/60)



第20図 SB 01出土遺物

S B 02 (第21図)

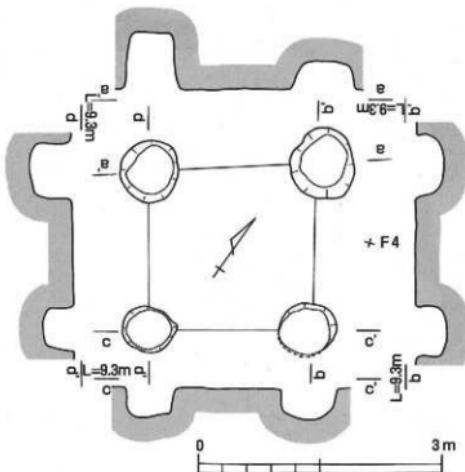
1×1 間の掘立柱建物跡で、約 $1.9m \times$ 約 $1.9m$ を測る。軸の方向は南北でN~ 35° ~Wである。遺物は少量の土師器片が出土した程度で詳細は不明である。⑤層と⑤-2層の間の遺構面で検出したことから、8~9世紀初頃の遺構と考えられる。SB 07 (N~ 32° ~W)、SB 13 (N~ 32° ~W)、SB 15 (N~ 32° ~W)と軸の方向がほぼ平行関係にある。

S B 03 (第22図)

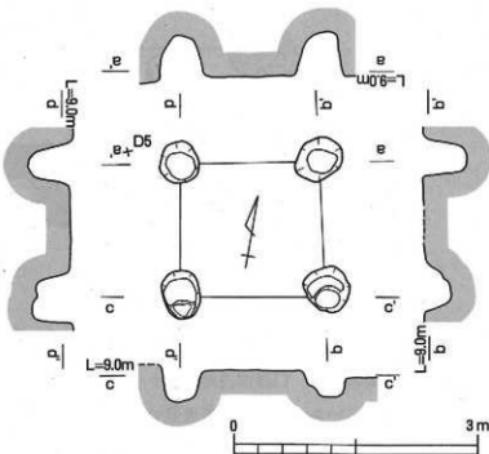
1×1 間の掘立柱建物跡で、約 $1.7m \times$ 約 $1.6m$ を測る。軸の方向は南北でN~ 10° ~Wである。遺物はなく詳細は不明であるが、⑤層と⑤-2層の間の遺構面で検出したことから、8~9世紀初頃の遺構と推定される。しかしながらSB 01と遺構が被ることや、軸の方向が平行関係にないことから、8~9世紀初の間でもSB 01とは時期差があるものと推定される。SB 11 (N~ 10° ~W)、SA 02 (N~ 80° ~E)、SA 04 (N~ 80° ~E)と軸の方向が平行・垂直関係にある。

S B 04 (第23、24図)

3×2 間の掘立柱建物跡で、桁行約 $5.8m$ ×梁間約 $4.1m$ を測る。

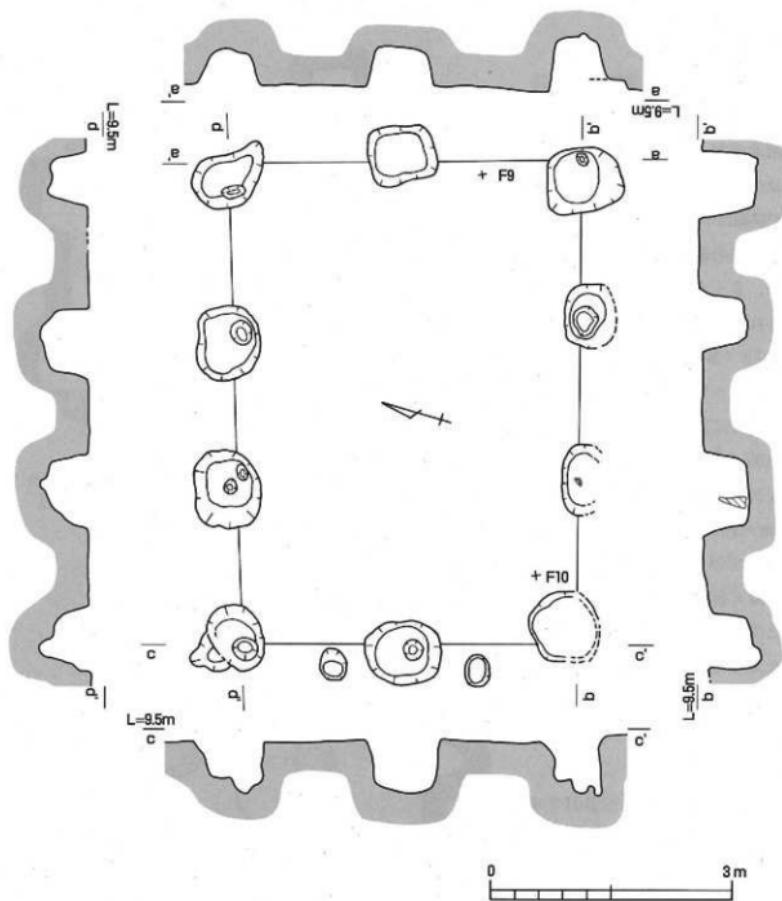


第21図 SB 02 遺構実測図 (S=1/60)



第22図 SB 03 遺構実測図 (S=1/60)

軸の方向は南北でN~15°~Wである。遺物は少量の土器片が出土した程度で詳細は不明であるが、⑤層と⑥層の間の造構面で検出したことから、7世紀後半~9世紀初頃の造構と考えられる。SB05 (N~16°~W)、SB09 (N~16°~W)、SB12 (N~16°~W)と軸の方向がほぼ平行関係にある。



第23図 SB 04 遺構実測図 (S=1/60)

第24図1は土師器壺で、口縁部内外面にナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。2, 3は須恵器である。2は坏身で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がった後外傾し、端部を丸く仕上げる。一方、口縁部内側には小型のかえりが施され、かえり端部は尖らせている。外面に自然軸が付着している。3は高坏の脚部で、内

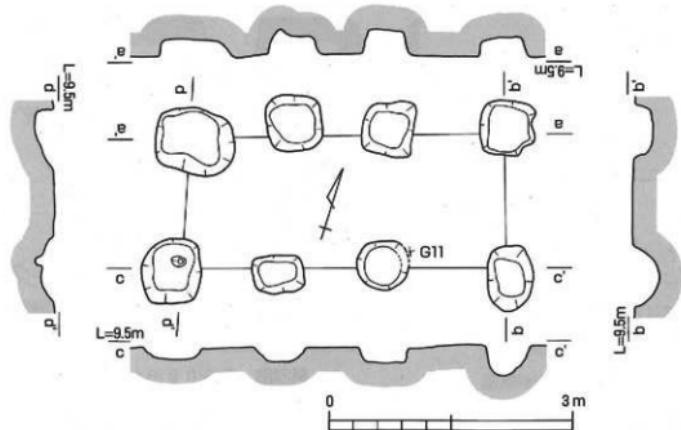


第24図 SB 04 出土遺物

外面ともに回転ナデ調整を施す。裾部は外反しながら伸び、端部を肥厚させ平坦面を作っている。

S B 05 (第25, 26図)

3×1 間以上の掘立柱建物跡で総柱の可能性がある。桁行約3.9m×梁間約1.6mを測り、軸の方向は南北でN~16°~Wである。遺物は少量の土器片が出土した程度で、詳細は不明であるが、⑤層と⑥層の間の遺構面で検出したことから、7世紀後半~9世紀初頃と推定される。S B 04 (N~15°~W)、S B 09 (N~16°~W)、S B 12 (N~16°~W)と軸の方向がほぼ平行関係にある。



第25図 SB 05 遺構実測図 (S=1/60)

第26図1は坏身で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がった後内湾気味に外傾し、端部を丸く仕上げる。

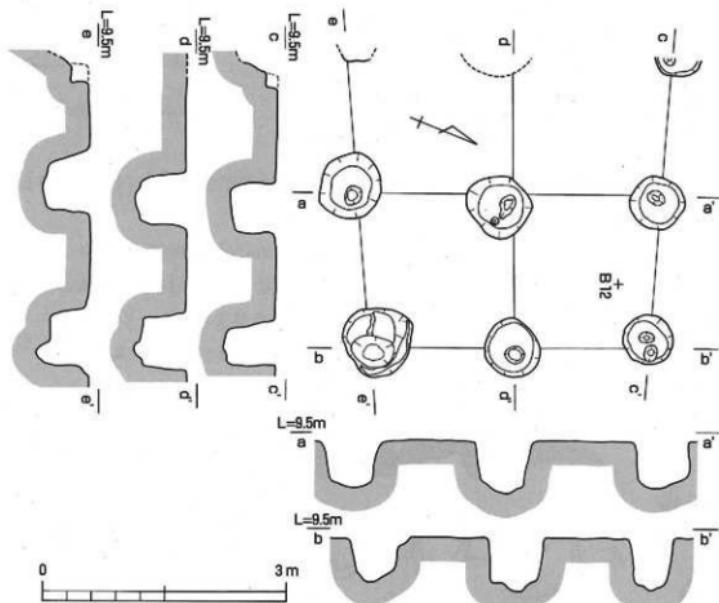
一方、口縁部内側には小型のかえりが施され、かえり端部は尖らせている。

S B 06 (第27, 28図)

2×2 間以上の掘立柱建物跡で総柱の可能性がある。約3.6m以上×約3.3mを測り、軸の方向は南北中軸でN~22°~Wである。遺物は少量の土器片が出土した程度で、詳細は不明であるが、⑤層と⑥層の間の遺構面で検出したことから、7世紀後半~9世紀初頃の遺構と考えられる。S B 10 (N~22°~W)、S A 01 (N~69°~E)と軸の方向がほぼ平行・垂直関係にある。



第26図 SB 05 出土遺物



第27図 SB 06 遺構実測図 (S=1/60)

第28図 1～3は須恵器杯で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。

1は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。2は器壁と底部の界線が明確

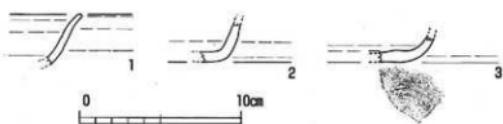
でない。3は底部に回転ヘラケズリ調整または回転ヘラ切り調整が施されている。

S B 07 (第29図)

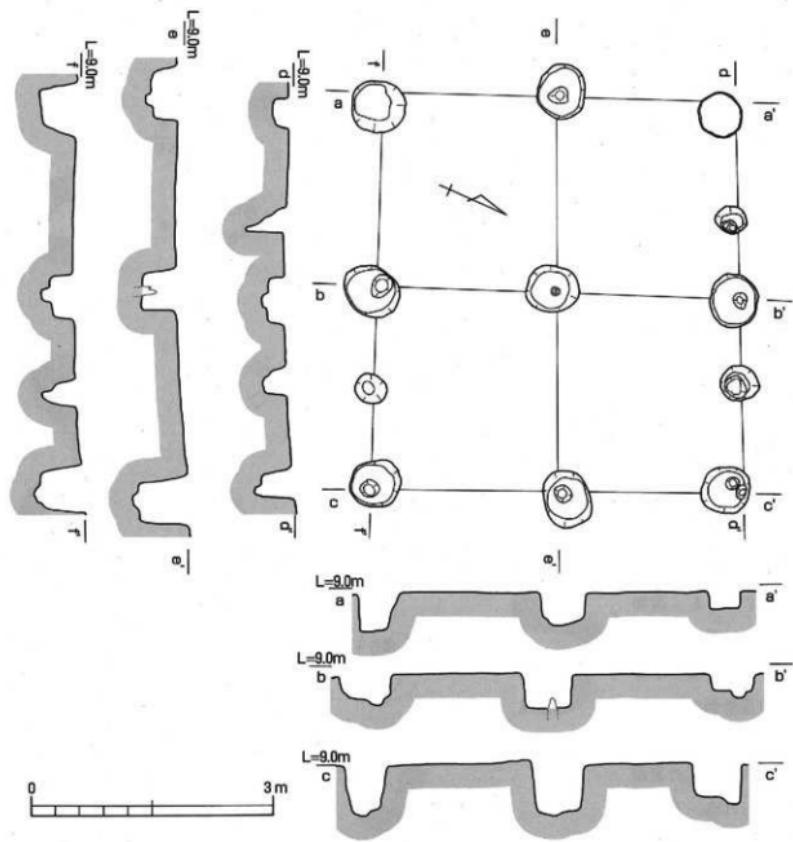
2×2 間の掘立柱建物跡で、柱9本以上から成る総柱建物跡である。約4.8m×約4.3mを測り、中央の柱穴には柱根が残存していた。中軸の方向は南北でN~32°~Wである。遺物は全くなく詳細は不明であるが、⑤層と⑤-2層の間の遺構面で検出したことから、8～9世紀初頃の遺構と推定される。SB13 (N~32°~W)、SB15 (N~32°~W)、SB02 (N~35°~W)と軸の方向がほぼ平行関係にある。

S B 08 (第30、31図)

3×1 間の掘立柱建物跡で、桁行約5.0m×梁間約1.9mを測る。軸の方向は南北でN~27°~Wである。遺物は少量の土器片が出土した程度で詳細は不明であるが、⑤層と⑥層の間の遺構面で検出したことと、SB01 (N~28°~W)、SA05 (N~60°~E)とほぼ平行・垂直関係にあることから、8世紀前半頃の遺構と推定される。



第28図 SB 06 出土遺物



第29図 SB 07 遺構実測図 ($S=1/60$)

第31図1は弥生土器壺で、内外面ともにナデ調整を施し、外面に指頭圧痕を残す。底部は平坦気味に仕上げている。2~4は須恵器で、2は坏蓋である。内外面に回転ナデ調整を施し、天井部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。肩部外面には2条の沈線が施されている。口縁部は天井部から内湾下方に垂直気味に伸び、端部を丸く仕上げている。3は坏身で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾気味に立ち上がり外傾する。端部は尖り気味に仕上げている。一方、口縁部内側にはかえりが施されているが、端部を欠損しており詳細は不明である。4は高坏の脚部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。裾部は外反し端部内側を外方にやや突出させ端部を尖らせている。透かしが残存している。

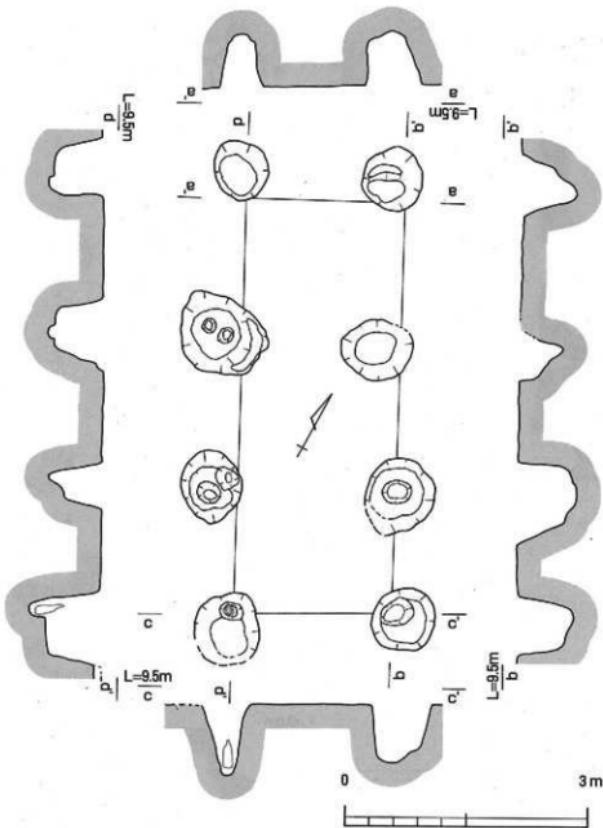
S B 09 (第32図)

2×1 間の掘立柱建物跡で、桁行約3.9m×梁間約2.1mを測る。軸の方向は南北で $N \sim 16^\circ \sim W$ である

る。遺物は少量の土器片が出土した程度で詳細は不明であるが、⑤層と⑥層の間の遺構面で検出したことから7世紀後半～9世紀初頃の遺構と推定される。SB04 (N~15°~W)、SB05 (N~16°~W)、SB12 (N~16°~W)と軸の方向がほぼ平行関係にある。

SB10 (第33図)

2×1間の掘立柱建物跡で、桁行約3.3m×梁間約2.0mを測る。軸の方向は南北でN~22°~Wである。遺物は全くなく詳細は不明であるが、⑤層と⑥層の間の遺構面で検出したことから、7世紀後半～9世紀初頃の遺構と考えられる。SB06 (N~22°~W)、SA01 (N~69°~E)と軸の方向がほぼ平行・垂直関係にある。



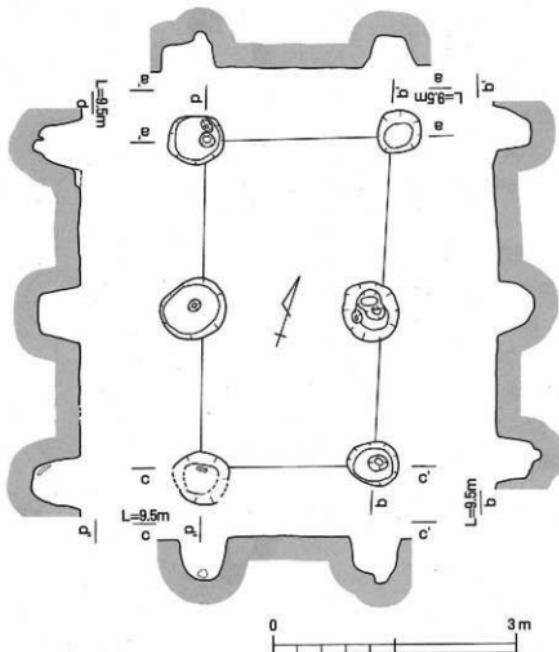
第30図 SB08 遺構実測図 (S=1/60)



第31図 SB08 出土遺物

S B11 (第34, 35
図)

4×2間の掘立柱建物跡で、桁行約6.2m×梁間約3.2mを測る。軸の方向は南北でN~10°~Wである。遺物は7世紀末~8世紀の遺物が少量出土している。⑤層と⑥層との間の遺構面で検出したことと、S B03 (N~10°~W)、S A02 (N~80°~E)、S A04 (N~80°~E)と軸の方向が平行・垂直関係にあることから、8~9世紀初頃の遺構と推定される。S B04との切り合い関係からS B04より新しい遺構と考えられる。



第32図 S B09 遺構実測図 (S=1/60)

S B12 (第36, 37図)

2×2間の掘立柱建物跡で、桁行約4.3m×梁間約3.9mを測る。軸の方向は南北でN~16°~Wである。⑤層と⑥層との間の遺構面で検出したことから、7世紀後半~9世紀初頃の遺構と推定される。S B04 (N~15°~W)、S B05 (N~16°~W)、S B09 (N~16°~W)、と軸の方向が平行関係にある。

第37図1は土師器窯の口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。立ち上がりは外反気味に伸び、端部は尖り気味に仕上げている。

S B13 (第38, 39図)

1×1間の掘立柱建物跡で、約2.2m×約1.7mを測る。⑤層と⑥層との間の遺構面で検出したこと、S B07 (N~32°~W)、S B15 (N~32°~W)、S B02 (N~35°~W)と軸の方向がほぼ平行関係にあることから、8~9世紀初頃の遺構と考えられる。

第39図1は坏身で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は外傾し端部を尖り気味に仕上げている。一方、口縁部内側にはかえりが施されている。

S B14 (第40図)

4×2 間の掘立柱建物跡で、桁行約7.1m × 梁間約3.6mを測る。軸の方向は南北でN~5°~Wである。 $\textcircled{5}$ 層と $\textcircled{6}$ 層の間の遺構面で検出したことから、7世紀後半~9世紀初頃の遺構と考えられる。

S B16 (N~8°~W)、S A03 (N~83°~E)、と軸の方

向がほぼ平行・垂直関係にある。

S B15 (第41、42図)

1×1 間の掘立柱建物跡で、桁行約2.6m × 梁間約2.2mを測る。軸の方向は南北でN~32°~Wである。 $\textcircled{5}$ ~ $\textcircled{2}$ 層上面で検出したことから、8~9世紀初頃の遺構と考えられる。S B07 (N~32°~W)、S B13 (N~32°~W)、S B02 (N~35°~W)と軸の方向がほぼ平行関係にある。

第42図1は赤彩土器で、内外面ともにナデ調整した後赤彩を施している。口縁部端部は尖り気味に仕上げている。

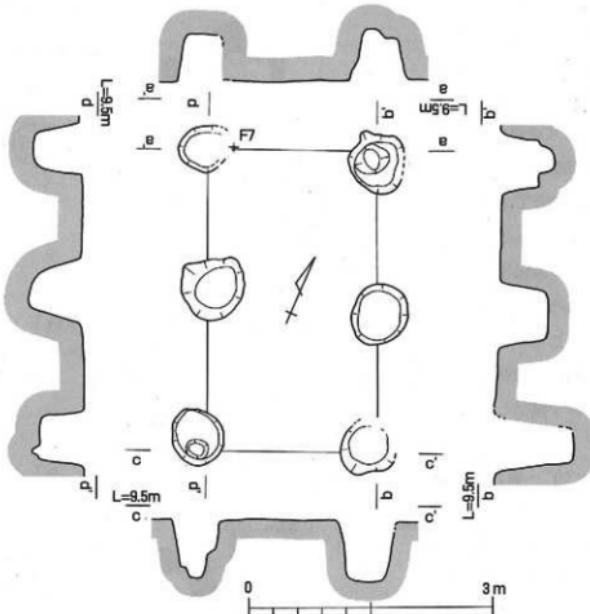
S B16 (第43図)

3×2 間の掘立柱建物跡で、桁行約4.7m × 梁間約3.8mを測る。軸の方向は南北でN~8°~Wである。 $\textcircled{5}$ 層と $\textcircled{6}$ 層の間の遺構面で検出したことから、7世紀後半~9世紀初頃の遺構と推定される。S B14 (N~5°~W)、S A03 (N~83°~E)と軸の方向がほぼ平行・垂直関係にある。

c. 棚列遺構

S A01 (第4、44、45図)

6間の棚列跡で、軸の方向はN~69°~Eである。 $\textcircled{5}$ 層と $\textcircled{6}$ 層の間の遺構面で検出したことから、



第33図 S B10 遺構実測図 (S=1/60)

7世紀後半～9世紀初頃の遺構と考えられる。

S B06 (N～22°～W)、
S B10 (N～22°～W)
とはほぼ垂直関係にある。

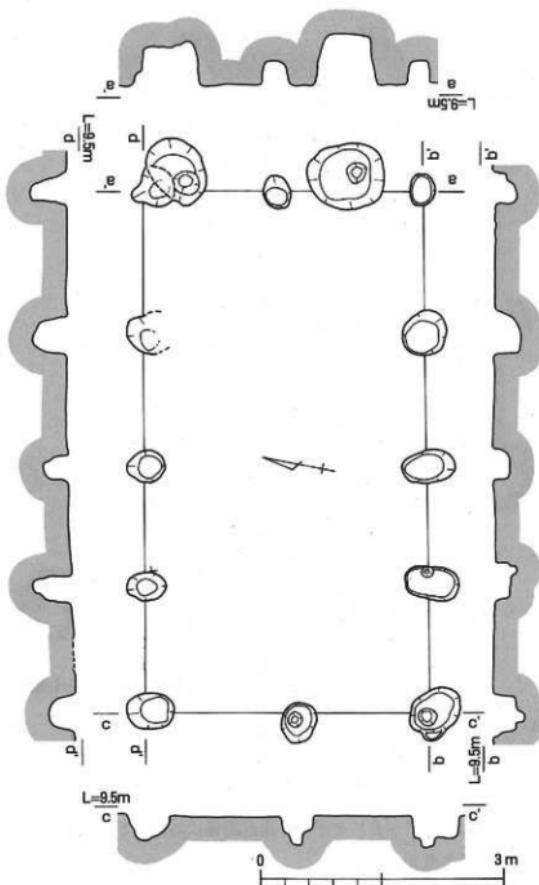
第45図1は弥生土器で、内面にナデ調整、外面にハケ目調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がった後、端部を肥厚させて平坦面を作る。

S A02 (第4, 46図)

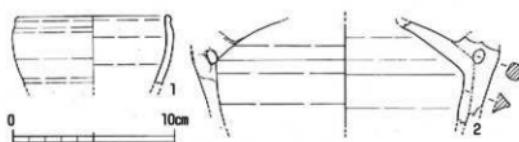
3間の柵列跡で、軸の方向はN～80°～Eである。⑤層と⑥層の間の遺構面で検出したことと、S B03 (N～10°～W)、S B11 (N～10°～W)、S A04 (N～80°～E)と平行・垂直関係にあることから、8～9世紀初頃の遺構と考えられる。

S A03 (第4, 47図)

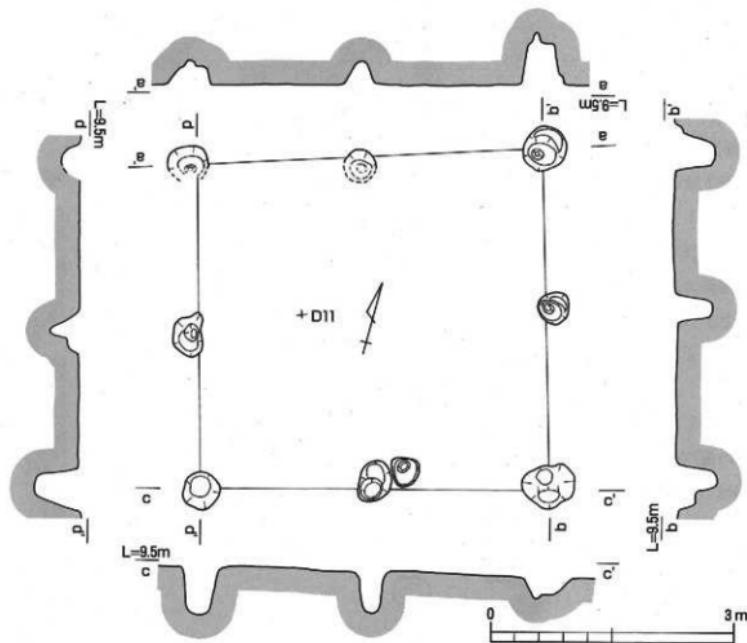
3間の柵列跡で、軸の方向はN～83°～Eである。⑤層と⑥層の間の遺構面で検出したことから、7世紀後半～9世紀初頃の遺構と考えられる。S B14 (N～5°～W)、S B16 (N～8°～W)とほぼ垂直関係にある。



第34図 SB11遺構実測図 (S=1/60)



第35図 SB11出土遺物



第36図 SB 1 2 遺構実測図 (S=1/60)

S A 04 (第4, 48図)

3間の柵列跡で、軸の方向はN~80°~Eである。⑤層と⑥層の間の遺構面で検出したことと、SB 03 (N~10°~W)、SB 11 (N~10°~W)、SA 02 (N~80°~E)と平行・垂直関係にあることから、8~9世紀初頃の遺構と考えられる。

S A 05 (第4, 49図)

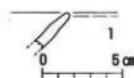
2間の柵列跡で、軸の方向はN~60°~Eである。SB 01 (N~28°~W)、SB 08 (N~27°~W)とほぼ垂直関係にあることから、8世紀前半頃の遺構と考えられる。

d. 井戸状遺構

S E 0 1 (第4, 50図)

素掘りの井戸跡で、土製支脚、土師器、須恵器などの破片が出土している。遺物の時期から、8世紀頃の遺構と考えられる。

第50図1は赤彩土器で、2~5は土師器である。1~4は壺で、口縁部内外面ともにナデ調整を施す。1は内面に赤彩を残す。口縁部は外方に直線的に立ち上がった後外傾し、端部は尖り気味に仕上げている。2は内湾気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。3は体部内面にヘラケズリ調整、体部



第37図 SB 1 2 出土遺物

外面にハケ目調整を施す。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。4は体部内面にヘラケズリ調整、肩部外面にヘラ状工具痕を残す。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げている。5は竈または土製支脚の脚部である。内面にナデ調整、外面にハケ目調整及び指頭圧痕を残す。断面に粘土の接合痕が残る。6, 7は須恵器である。6は蓋

口縁部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。端部はやや肥厚させて平坦面を作っている。7は高坏脚部で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、透かしを作る。脚部は外反気味に広がり裾部で外傾する。

e. その他の遺構

S X02 (第4, 51図)

平面隅丸長方形を呈する焼土壙で、縦長約1.00m、横幅約0.74m、深さ約0.2mを測る。器壁及び底部が焼き締まり、底部に炭が堆積している。遺物は鍛造薄片など微細な遺物さえも出土しなかったが、遺構の時期は⑤層と⑤-2層の間の面で検出されたことから、8～9世紀初と考えられる。

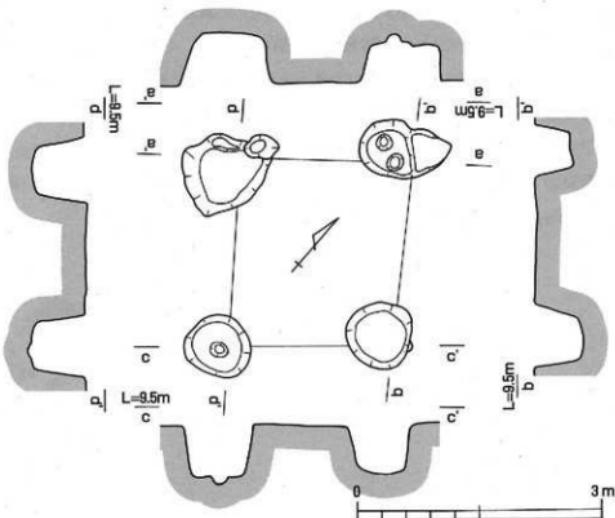
S X01 (第4, 51図)

平面梢円形を呈する焼土壙で、縦長約0.88m、横幅約0.70m、深さ約0.18mを測る。底部には炭が堆積している。遺物は鍛造薄片など微細な遺物さえも出土しなかったが、遺構の時期は⑤層と⑤-2層の間の面で検出されたことから、8～9世紀初と考えられる。

S X04 (第4, 52図)

遺構内出土遺物及び⑤層と⑥層の間の遺構面で検出したことから、7世紀後半～9世紀初頃の遺構と考えられる。

第52図1は1～3は土師器竈である。1は竈の底周辺の破片で、底を体部に後付している。風化が著しいが、底内側にヘラミガキ調整、体部内側にヘラケズリ調整が残る。2は竈の口縁部に近い部分の破片で、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。立ち上がりは外反しながら



第38図 SB 1 3 遺構実測図 (S=1/60)

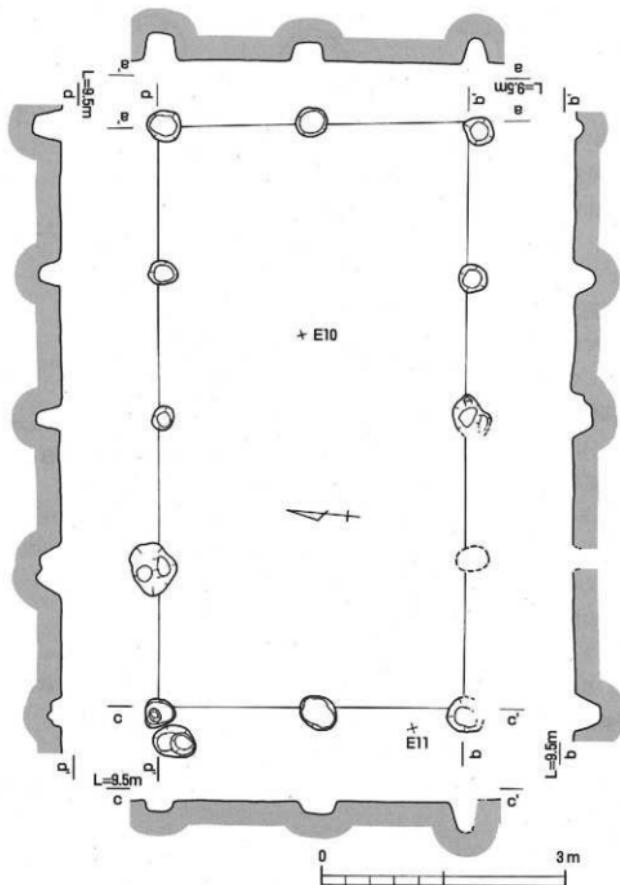


第39図 SB 1 3 出土遺物

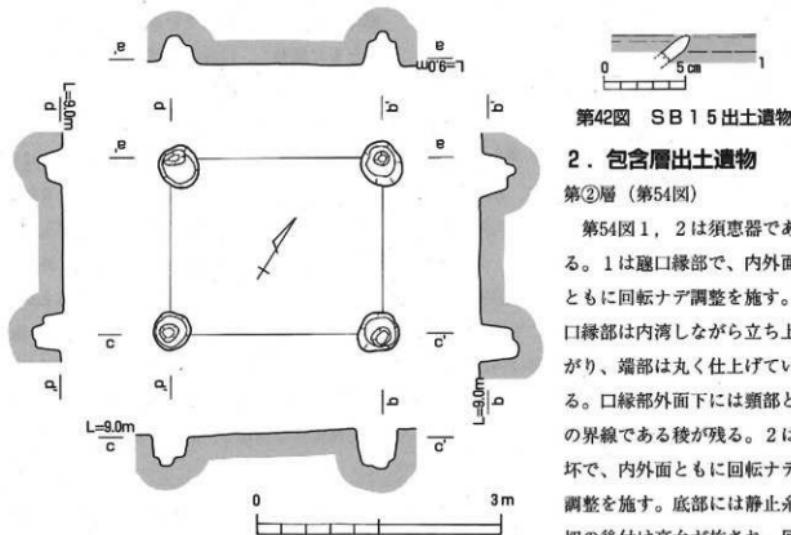
立ち上がる。3は窓の脚部で、据部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。据の広がりは外方に直線的に広がる。4は須恵器高坏で、風化が著しいが内外面ともに回転ナデ調整を施しているものと考えられる。器部と脚部の接合部付近に透かしの一部が残存する。
S X 0 5 (第4, 53図)

平面椭円形を呈する遺構で、縦長約0.91m、横幅約0.80m、深さ約0.44mを測る。

第53図1は須恵器高坏の器部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。



第40図 SB 1.4 遺構実測図 ($S=1/60$)



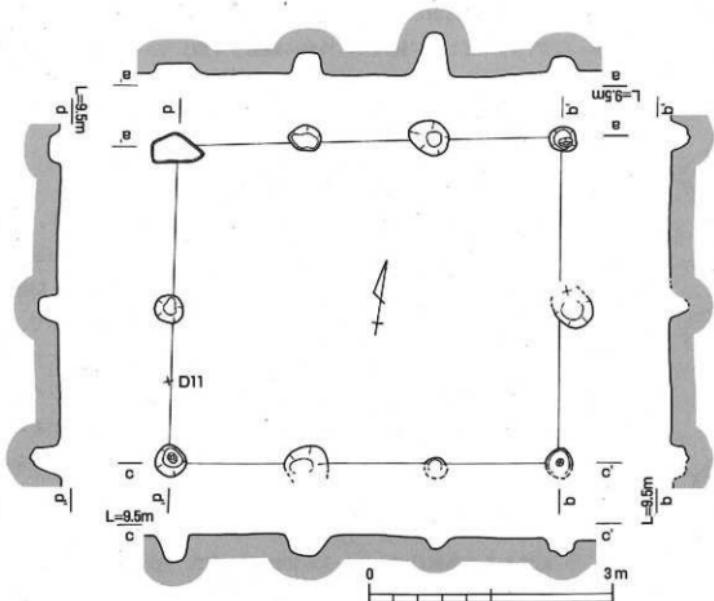
第41図 SB 15 遺構実測図 (S=1/60)

第42図 SB 15 出土遺物

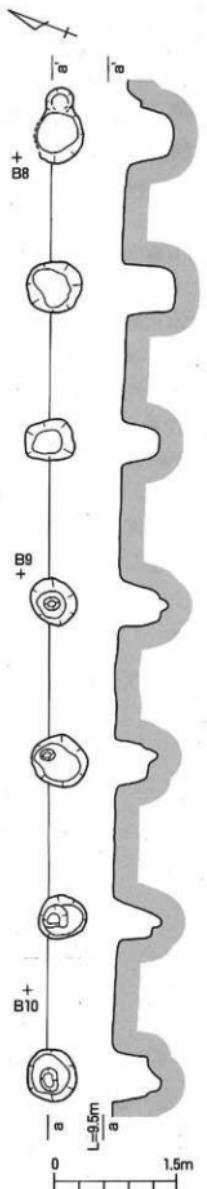
2. 包含層出土遺物

第②層（第54図）

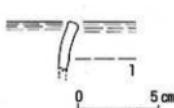
第54図 1, 2は須恵器である。1は縁口部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げている。口縁部外面下には頸部との界線である稜が残る。2は壺で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部には静止糸切の後付け高台が施され、回転ナデ調整している。高台端



第43図 SB 16 遺構実測図 (S=1/60)



第44図 SA 01 遺構実測図



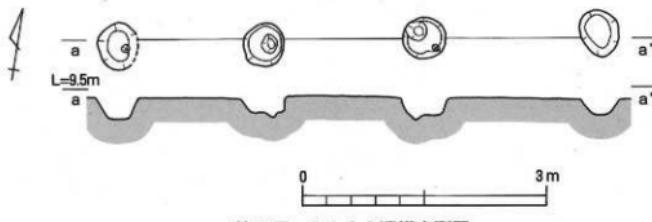
部は外方にやや突出している。3は白磁で、内外面ともに施釉し、口縁部端部及び端部内側を口禿にしている。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は平坦気味にしている。4、5は青磁碗で、内外面ともに施釉し、外面に雷文を施す。4は内湾気味に、5は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。6は備前焼亮で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外側に折り曲げ玉縁状としている。7は在地の火鉢または香炉で、内面に回転ナデ調整、外面にヘラミガキ調整後スタンプ文を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部に平坦面を作る。8は青花小皿で、内外面ともに染付及び施釉を施す。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を尖らせている。高台疊付は釉ハギし露胎としている。9は肥前系陶器底部である。外面は削り出しの三日月高台で露胎としている。内面見込は施釉し、胎土目積の痕跡が残る。

第③層（第55図）

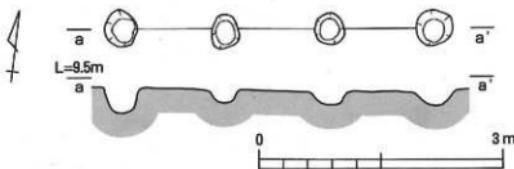
第55図1は須恵器杯で、体部内外面ともに回転ナデ調整、内面見込にナデ調整を施し、底部に回転ヘラ切り、付け高台の後、回転ナデ調整を施す。2、3は青磁である。2は同安窯系青磁で、内外面ともに施釉し貫入が入る。底部は露胎としている。内面見込には施文している。3は鎬蓮弁文碗で、内外面ともに施釉し、外面に鎬蓮弁を施している。4は在地の火鉢または香炉で、内面に回転ナデ調整、外面にヘラミガキ調整後スタンプ文を施す。器壁は外方に直線的に立ち上がる。

第④層（第56図）

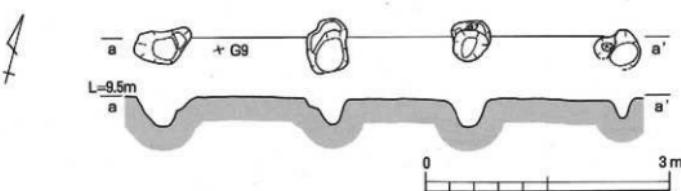
第56図1、2は弥生土器で、内外面ともにナデ調整を施す。1は口縁部を両側に拡張し、端部に2条、口縁部内面に2条の凹線を施す。2は外方に直線的に立ち上がり、端部及び口縁部内面に各1条以上の凹線を施す。3は土師器亮または瓶の口縁部で、内外面にナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。4は須恵器杯で、内外面ともに回転ナデ調整、底部に回転糸切、付け高台の後、回転ナデ調整を施す。器壁は内湾気味に立ち上がり、高台は端部で外方に突出させている。脩瞰の形態が橢円状に再加工されており、転用された可能性がある。5は土師質土器で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部は風化のため調整不明である。6は白磁の水注で、内外面ともに施釉し貫入が入る。口縁部は外反気味に立ち上がり、最上部で外側下に折り曲げている。威信財の可能性もある高級品である。7～10は青磁碗で、内外面ともに施釉する。7は無文の端反碗で、内湾気味に立ち上がった後外反する。端部は丸く仕上げている。8は内湾気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。外面に雷文



第46図 SA 0 2 遺構実測図



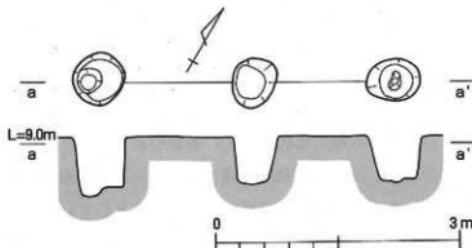
第47図 SA 0 3 遺構実測図



第48図 SA 0 4 遺構実測図

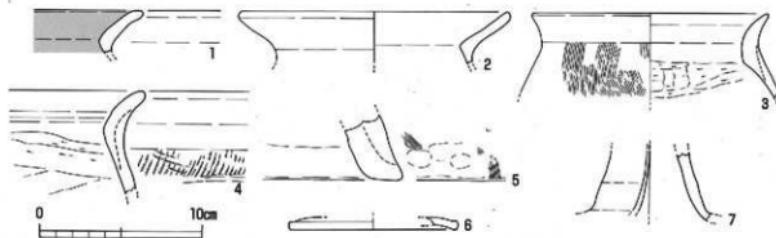
を施している。9は釉薬に貫入が入る。

口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。外面に形骸化した蓮弁文が線描される。10は高台疊付及び高台見込を露胎としている。内面見込に施文が残る。11、12は壺器系陶器である。11は内面にナデ調整後指頭圧痕、外面にナデ調整を施す。外面には粘土紐が貼付られ、下部に1条



第49図 SA 0 5 遺構実測図

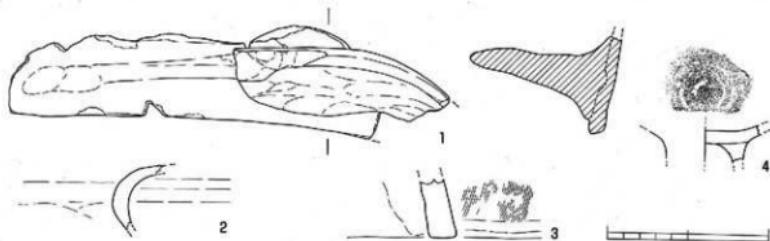
の稜を残す。後には自然釉が付着している。12は壺で、内面にナデ調整後指頭圧痕、外面にナデ調整を施す。外面に把手の痕跡と窯印の可能性があるヘラ書きが残る。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を外側下に折り曲げている。13、14は備前焼である。13は播鉢で、内外面ともにナデ調整を施す。胎土はほぼ還元焼成している。注口のほか、内面に播目、口唇部外面に重ね焼の痕跡が残る。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部内側を上方に突出させている。14は壺で、内面にナデ調整後指頭圧痕を施す。外面は肩部に多量の自然釉が付着する。15は中国製天目茶碗で、底部高台削り出し後、内外



第50図 SE 01出土遺物



第51図 SX 02・SX 01遺構実測図 (S=1/80)

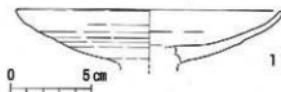


第52図 SX 04出土遺物

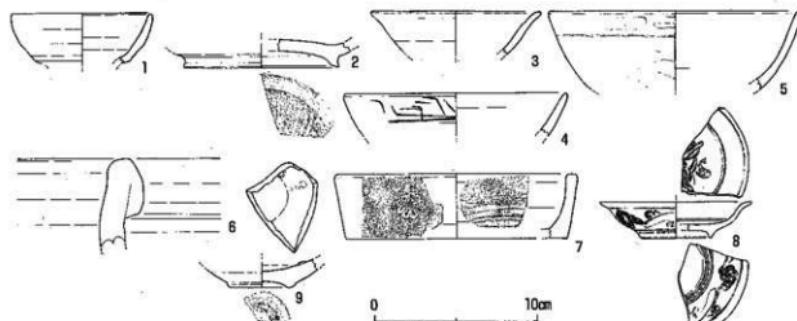
面ともに施釉し底部に露胎を残す。器壁の立ち上がりは外方に直線的である。16は京焼風陶器塊で、内外面ともに施釉し貫入が入る。一方、高台疊付及び高台見込は露胎としている。器壁の立ち上がりは内湾しながら立ち上がる。17は肥前系陶器捏鉢で、底部外面に回転ヘラケズリ調整を施し、内面見込には施釉後ハケ目調整している。18は肥前系染付で、内外面ともに施釉し、口縁部端部は釉ハギしている。外面には染付を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を尖り気味にしている。19、20は磁器碗で、内外面ともに施釉する。19は口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。青磁の2次焼成の可能性もある。20は器壁が外方に直線的に立ち上がり、高台端部は尖らせている。

第④-1層（第57~59図）

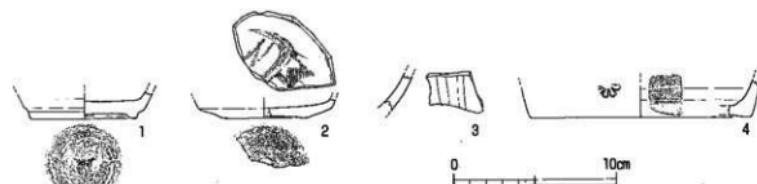
第57図1~3は弥生土器である。1は壺の口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は内湾



第53図 SX 05出土遺物

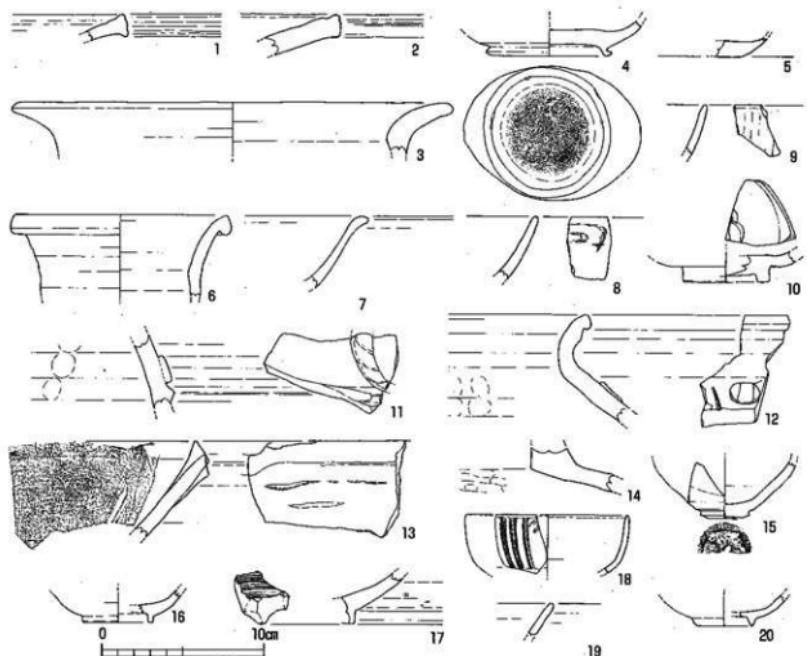


第54図 第②層出土遺物



第55図 第③層出土遺物

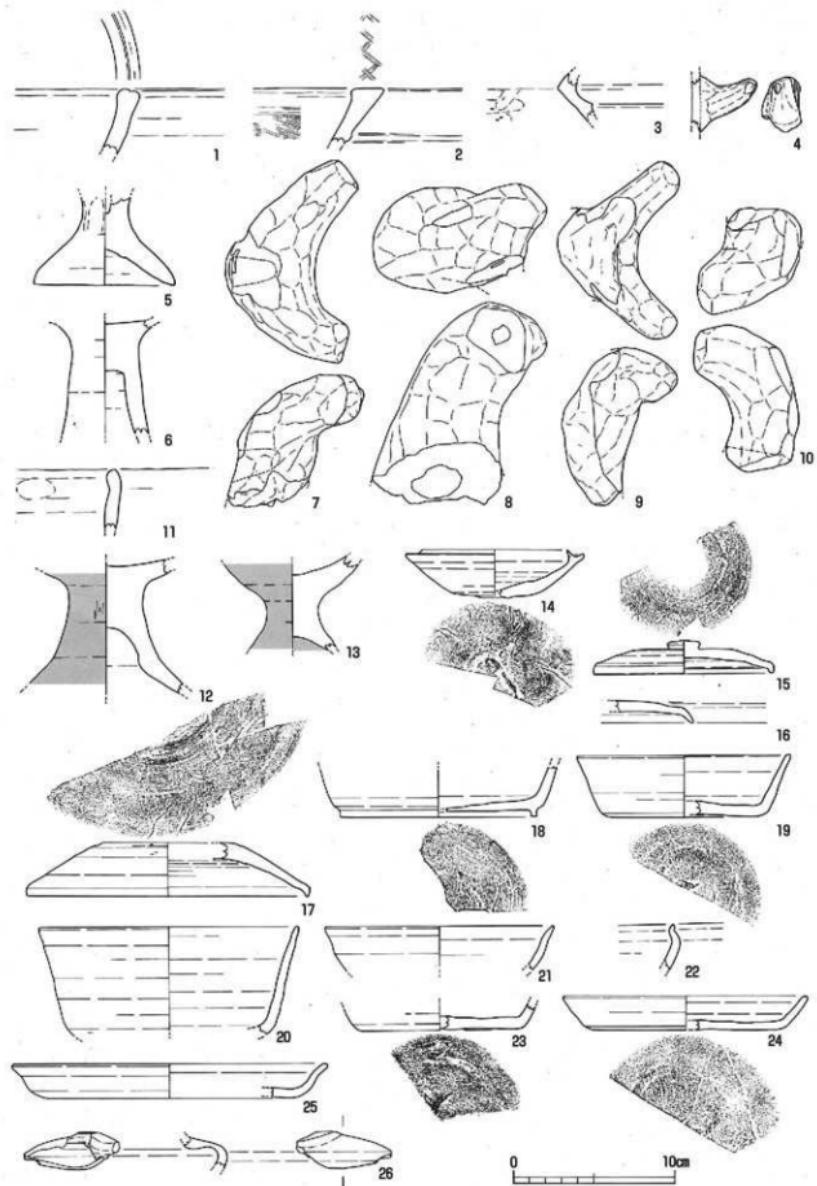
気味に立ち上がり、端部を肥厚させて1条の凹線を施している。2は口縁部外面にナデ調整、口縁部内面にハケ目調整、口縁部端部に斜格子文を施し、口縁部端部内側はハケ目をナデ消している。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部は水平な平坦面を作っている。3は器台の頸部下で、内面にヘラケズリ調整、外面にナデ調整を施す。4~10は土器である。4は瓶の把手で、体部内面は風化のため調整が不明であるが、把手外面にはヘラミガキ調整を施している。5、6は高壺脚部で、風化が著しいが、5は外面にヘラミガキ調整が残る。一方、脚柱内面には穿孔を残す。脚部の広がりは外方に直線的に伸び、端部を尖らせている。6は脚部の広がりはやや外方に外反気味に伸びる。7~10は土製支脚で、外面にヘラミガキ調整を施す。7、10は穿孔が施され、10は貫通している。一方、8には底部に縫合が残っている。11は製塙土器で、口縁部端部内外面及び内面にナデ調整を施し、内面には指頭圧痕も残る。口縁部は内湾気味に立ち上がった後内傾し、端部は丸く仕上げている。12、13は赤彩土器高壺で、風化が著しい。12は外面に若干のハケ目調整、赤彩が残る。脚部の広がりは根部で外傾し、直線的に広がる。13は外面及び脚部内面に若干の赤彩が残る。器壁の立ち上がりは内湾気味である。14~26は須恵器である。14は壊身で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整、底部外面に回転ヘラ切り調整を施す。口縁部は外方に直線的に伸びた後やや外傾し、端部は尖り気味に仕上げている。一方、口縁部内側には小型のかえりが施される。かえり端部は尖らせている。15~17は蓋である。15は口縁部内外面及び内面に回転ナデ調整、天井部に回転ヘラケズリ調整を施した後、扁平宝珠状の摘みを貼付して、回転ナデ調整を施している。口縁部は外反気味に伸びた後、下方に折れ曲がる。端部は尖り気味に仕上げている。16は口縁部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は外反気味に



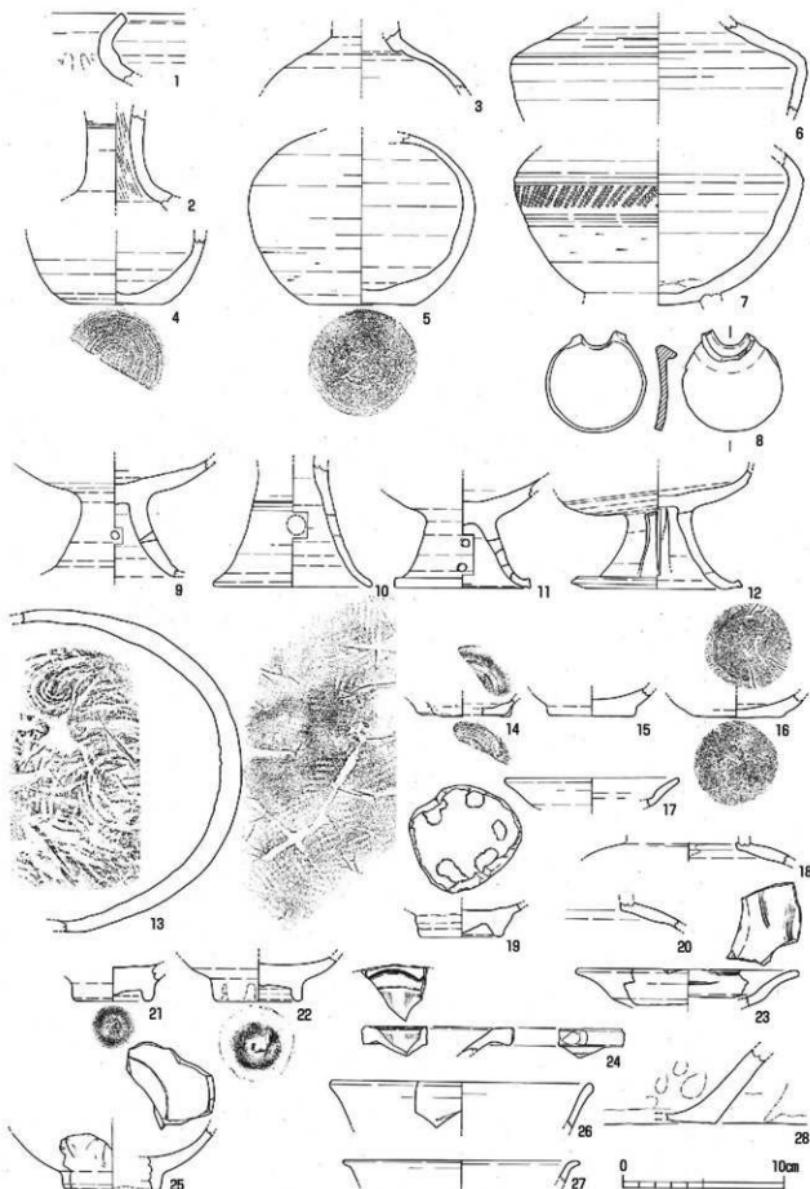
第56図 第④層出土遺物

伸びた後外傾し、端部は尖り気味に仕上げている。17は口縁部内外面及び内面に回転ナデ調整、天井部に回転ヘラケズリ調整を施す。口縁部は外方に直線的に伸びた後やや外反気味となり、下方に折れ曲がる。端部は尖り気味に仕上げている。天井部内外面は酸化焼成している。18~23は壺で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施す。18は底部外面に回転糸切を施し、高台を後付けして回転ナデ調整している。口縁部は外方に直線的に立ち上がる。高台はやや外傾し、端部に1条の沈線が残る。19は底部外面に回転ヘラ切り調整を施した後ナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。20は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。21は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。22は口縁部は括れた後外傾し、端部は尖り気味に仕上げている。23は底部外面に回転ヘラ切り調整を施す。24、25は皿で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施す。24は底部外面に回転ヘラ切り調整、内面見込にナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。25は底部外面は風化のため調整不明である。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。26は平瓶のミニチュア土器片で、内外面ともに回転ナデ調整を施している。

第58図1~13は須恵器である。1は口縁部内外面ともにナデ調整を施し、頸部内面には指頭圧痕が残る。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部に平坦面を作っている。2~7は瓶である。2は頸部

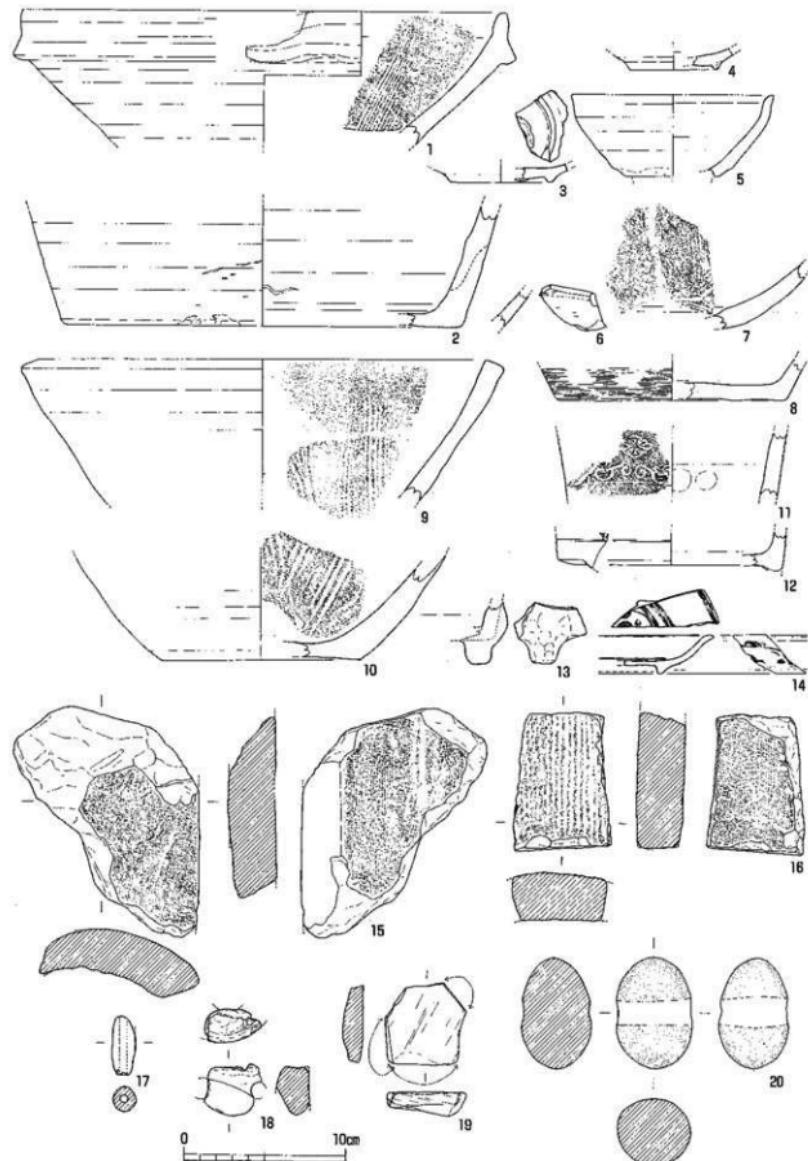


第57図 第④-1層出土遺物 1



第58図 第④-1層出土遺物 2

で、外面は回転ナデ調整の後、3条以上の沈線を施す。内面は肩部内面に回転ナデ調整が残るが、頸部内面には絞り痕が残る。頸部の立ち上がりはやや外反気味に立ち上がる。3は肩部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。頸部との接合痕が残る。4は底部で、体部外面上及び体部内面に回転ナデ調整、体部外面下から底部外面向にカキ目調整を施す。器壁は内湾しながら立ち上がる。5は体部外面上及び体部内面に回転ナデ調整、体部外面下から底部外面向に回転ヘラケズリ調整を施す。底部と体部の界線は明確にしている。6は肩部から体部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。肩部と体部の間には界線が作られ、肩部には灰が被る。7は体部外面上及び体部内面に回転ナデ調整、体部外面下から底部外面向に回転ヘラケズリ調整、底部内面にナデ調整を施す。底部外面上には高台を後付しナデ調整している。肩部と体部の間には界線が明確に作られ、体部上には上下2条の沈線の間に刺突文を入れている。8は須恵器の土製円盤で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、内面には指頭圧痕も残る。9～12は高坏である。9～11は内外面ともに回転ナデ調整を施す。9は器壁は内湾気味に立ち上がり、脚部の広がりは外反しながら伸びる。脚部には小円形状の透かしが施されている。10は脚部の広がりは外反気味に伸び、裾部で外反する。端部は丸く仕上げている。透かしの一部と外面に2条の沈線が残る。11は器壁は内湾気味に立ち上がる。脚部の広がりは裾部で外反し、端部を両側にやや肥厚させて平坦面を作る。脚部に小円形状の透かしが上下2段に作られている。12は器壁は内湾しながら立ち上がり、器壁外面中程に1条の沈線を残す。脚部の広がりは外反しながら伸び、端部で両側にやや肥厚させ下部をやや突出させる。2方向に台形透かしが施されている。13は横瓶の体部で、内面に青海波及びナデ調整、外面上に平行タタキ及びカキ目調整を施す。14～16は土師質土器で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。14、16は底部外面上に回転糸切痕を残すが、15は風化のため底部調整は不明である。器壁は14が外反気味に、15、16が内湾気味に立ち上がる。17～20は白磁である。17は小皿で、内外面ともに施釉する。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器壁と内面見込の間に界線を施している。18は四耳壺の肩部で、外面を施釉し内面は露胎としているが、肩部内面に若干の釉が流れ込んでいる。19は碗で、内外面ともに施釉し若干の貫入が入る。内面見込には5箇所に砂目積みの痕跡が残る。20は壺の肩部で、内外面ともに施釉する。外面に若干の貫入が入る。21～27は青磁である。21、22は碗の底部で、内外面ともに施釉した後、高台置付及び高台内側を釉ハギする。22は釉薬に貫入が入る。また高台内側釉ハギ後、高台内側に再度釉薬が付着する。器壁は内湾気味に立ち上がっている。23は稜花皿で、内外面ともに施釉し内面に文様を施す。釉薬には貫入が入る。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げているが、一部に面取が施されている。器壁外面下方には1条の界線が作られている。24は稜花鉢の口縁部で、内外面ともに施釉し内面に文様を施す。釉薬には貫入が入る。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、水平に折れ曲がる。端部は肥厚させて平坦面を作るが、一部に面取りをしている。25は鏽蓮弁文碗で、内外面ともに施釉する。内面見込及び外面には文様が施される。一方、高台内側は露胎としている。26、27は端反碗で、内外面ともに施釉する。26は外面に文様が施される。口縁部は内湾気味に立ち上がり外反気味となる。端部は丸く仕上げている。27は口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。28は壺器系陶器で、内面に指頭圧痕が残り、内外面に自然釉がかかる。器壁の立ち上がりは外方に直線的で、器壁外面と底部外面上の界線はシャープである。

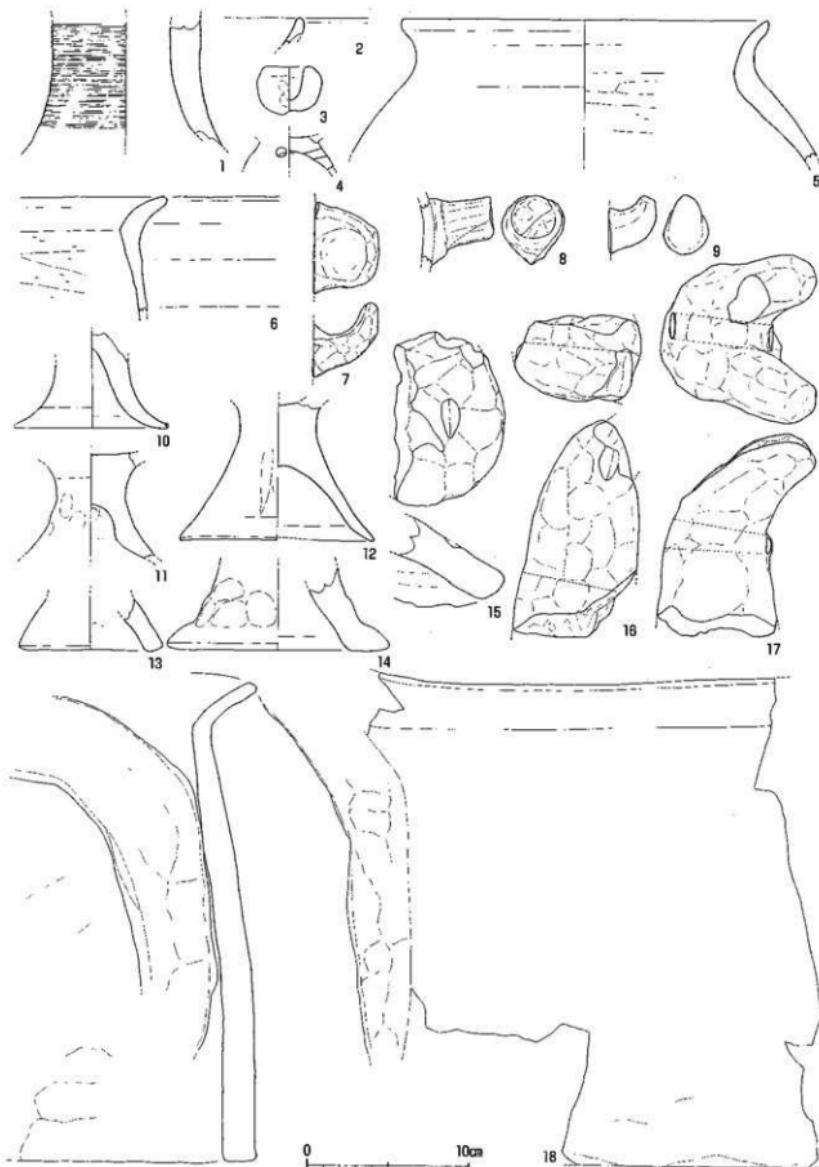


第59図 第④-1層出土遺物 3

第59図1, 2は備前焼である。1は播鉢で、内外面ともにナデ調整を施し、内面に11条以上の単位で擗目を施す。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を両側に肥厚し、内側を上方に突出させて平坦気味にしている。口縁部に注口の一部が残る。2は甕の底部で、内外面ともにナデ調整を施し、体部外面最下部にヘラケズリ調整を施す。底部内面には灰が被っている。器壁の立ち上がりは外方に直線的で、内外面及び断面には粘土の接合痕が残る。3～5は瀬戸焼である。3, 4は灰釉皿で、同一個体の可能性もある。内外面ともに施釉し、高台外側には釉溜ができている。釉薬には貫人が入る。3の高台見込に粘土塊が残る。5は天目茶壺で、内外面に鉄釉を施し、底部外面周辺を露胎にしている。露胎では回転ヘラケズリ調整が確認できる。口縁部は口唇部で直立気味に立ち上がった後外傾し、端部は尖り気味に仕上げている。6は中国製天目茶碗で、内外面に鉄釉を施し、底部外面周辺を露胎にしている。露胎では回転ヘラケズリ調整が確認できる。器壁の立ち上がりは、外方に直線的である。7, 8は瓦質土器である。7は播鉢で、外面は風化のため調整不明であるが、内面に擗目を残す。器壁は内湾気味に立ち上がる。8は火鉢の底部と考えられる。内面に回転ナデ調整、外面にハケ目調整を施す。器壁は外方に直線的に立ち上がる。9～13は在土地上器である。9, 10は播鉢で、内外面ともにナデ調整を施し、内面に擗目を施す。9は口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はやや肥厚させて平坦面を作る。10は底部で、器壁は内湾気味に立ち上がる。内面見込には擗目が施されていない。11, 12は香炉で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、外面にスタンプ文を施す。器壁はやや外方に直線的に立ち上がる。11は回転ナデ調整後、内面に指頭圧痕を施す。12は底部に小型の脚を作る。13は火鉢の脚部で、外面にヘラミガキ調整を施している。14は青花皿で、内外面ともに施釉し染付を施すが、高台の大部分は釉ハギにより露胎としている。口縁部は口唇部で外反し、端部を尖らせている。15, 16は布目瓦である。15は丸瓦で、凹面に布目痕が残るが、凸面は風化のため調整不明である。16は凹面に布目痕が残り、凸面に繩タタキ痕が残る。凸面端角に押圧された痕跡が残る。17は土錘で、外面にヘラミガキ調整を施す。18は羽口で、側面2か所に穿孔の痕跡が残る。多量の自然釉が付着している。19は砥石で、4面以上を砥面として利用している。20は石錘で、楕円球状を呈し、中程で帯状に薄く繰込んでいる。

第⑤層（第60～64図）

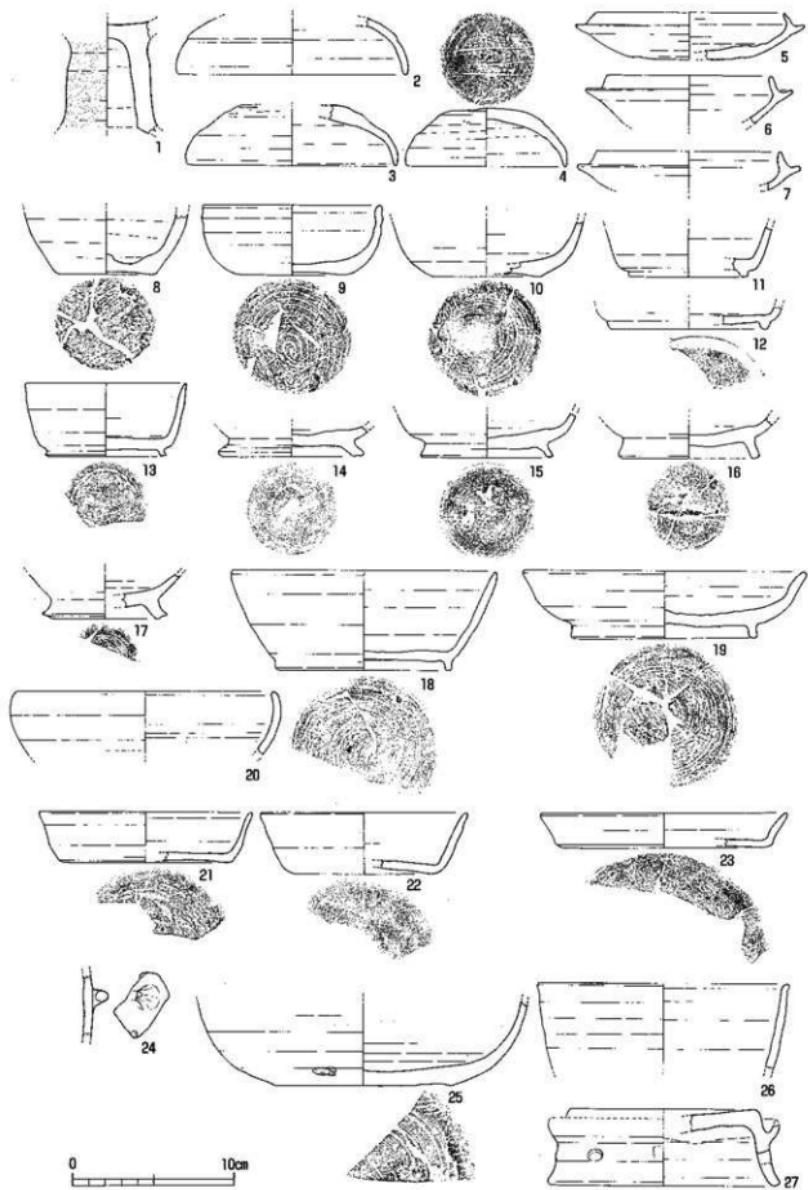
第60図1は弥生土器高坏脚部で、内面にヘラケズリ調整、外面に21条以上の振凹線が残る。裾部の広がりは、外反しながら伸びる。2～18は土師器である。2は口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げている。3はミニチュア土器で、手捏成形している。内外面にナデ調整を施し、外面には指頭圧痕も残る。4は低脚坏脚部で、外面にナデ調整が残るが、全体的に風化が著しく他は調整不明である。脚部の広がりは内湾気味で、小丸状の穿孔が施されている。5, 6は甕で、口縁部内外面及び頸部外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。体部外面は風化のため調整不明である。口縁部は外反しながら立ち上がり、5は端部内側を尖らせて外方に突出させ、6は端部を丸く仕上げている。7～9は甕の把手で、外面にヘラミガキ調整を施す。7は扁平角型、8は柱状型、9は角型を呈す。8には粘土の接合痕が残り、端部に指頭圧痕も残る。10～12は高坏脚部である。10は内外面ともに風化が著しく調整不明で、裾部は外反しながら広がる。11も風化が著しいが、脚部内外面に指頭圧痕が残る。脚部は外反しながら広がる。12は脚部



第60図 第⑤層出土遺物 1

外面にヘラミガキ調整、裾部内外面にナデ調整を施す。脚部は外反気味に広がり、端部を尖り気味に仕上げている。13~17は土製支脚である。13, 14は風化が著しいが、13は内面にヘラケズリ調整が残る。脚部は内湾気味に広がり、端部で平坦面を作っている。14は外面に指頭圧痕が残る。脚部は外反気味に伸びた後外傾し、端部は丸く仕上げている。15は内面にナデ調整、外面にヘラミガキ調整を施す。脚部は外方に直線的に広がり、端部に平坦面を作る。16, 17は柱部で外面にヘラミガキ調整を施し、穿孔を貫通させている。17は2本の突起を持つタイプである。18は竈で、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施し、底外面にはヘラミガキ調整を施している可能性がある。底内面及び体部外面は風化が著しく調整不明である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。

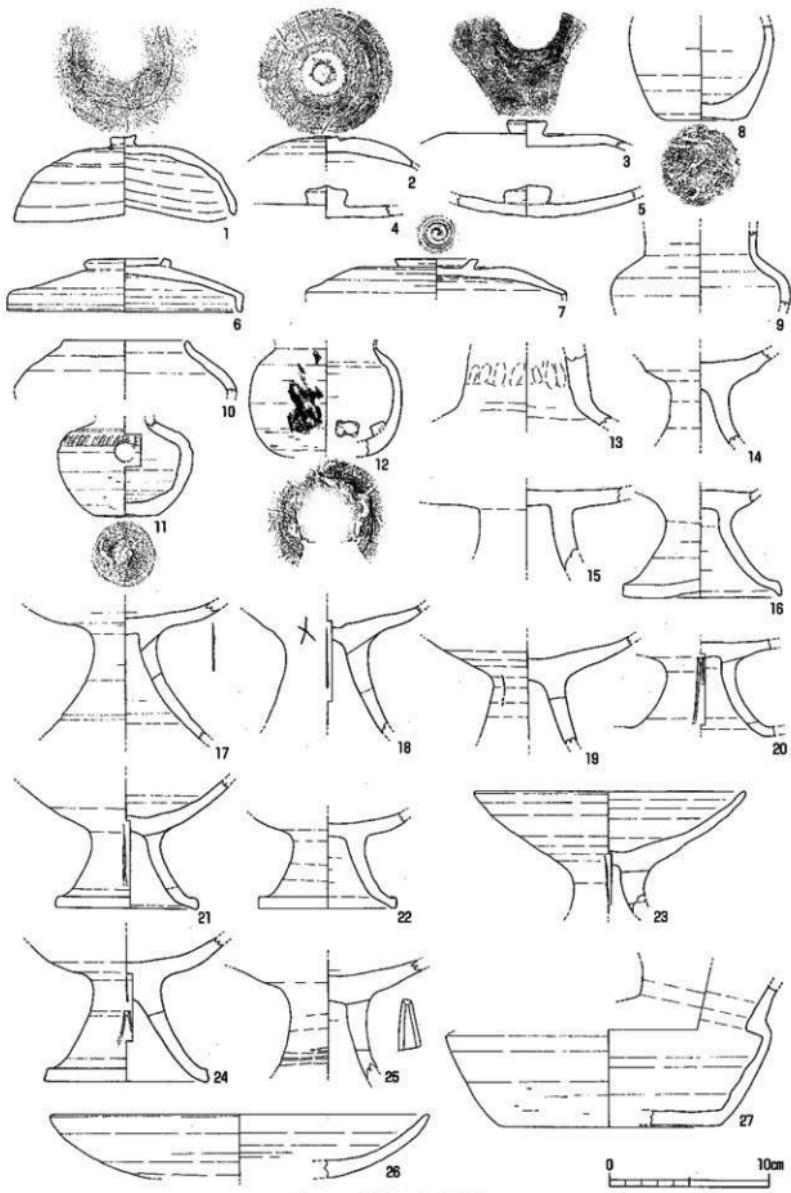
第61図1は赤彩土器で、風化が著しい。脚部外面及び器部内面見込に若干の赤彩が残る。脚部はやや外方に直線的に広がり、裾部で外傾する。2~27は須恵器である。2~4は壺蓋で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施す。3, 4は天井部外面に回転ヘラケズリ調整、天井部内面には回転ナデ調整が施され、4の天井部外面にはヘラ記号も残る。2は口縁部は内湾しながら伸び、端部は丸く仕上げている。肩部外面には稜が施されている。3は肩部下でやや括れた後内湾気味に伸びる。端部は尖り気味に仕上げている。4は内湾しながら伸び、口縁部はやや外傾する。端部は尖らせている。5~7は壺身で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施す。5は内面見込にナデ調整が施される。口縁部は内湾気味に立ち上がった後外傾し、端部は尖らせている。一方、口縁部内側にはかえりが施され、内側に直線的に立ち上がる。かえり端部は尖らせている。6, 7は内湾気味に立ち上がった後やや外傾し、6は端部を尖り気味に、7は端部を丸く仕上げている。6, 7ともに口縁部内側にはかえりが施され、内傾後やや反り上がる。かえり端部は尖り気味にしている。8は瓶で、内外面ともに回転ナデ調整、底部に回転糸切または静止糸切を施す。内面見込が勝状にナデ上げられている。9~18, 21, 22は壺で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。9, 10は底部に回転糸切を施す。9は口縁部は2段の括れを持った後、端部を尖り気味に仕上げている。10は内面見込にナデ調整を施す。器壁は内湾しながら伸びた後、外方に直線的に立ち上がる。11~18は高台付壺である。11は器壁は外方に直線的に立ち上がる。12, 13は内面見込にナデ調整を施す。13は口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を尖らせている。11~13は底部に高台を貼付し、回転ナデ調整を施している。14~17は高台が外側に開くタイプの壺で、底部に高台を貼付し回転ナデ調整を施している。14, 15は内面見込にナデ調整を施す。14, 16は底部は回転ヘラ切り調整後、高台を貼付し回転ナデ調整を施している。14は器壁は内湾気味に立ち上がり、高台は外方に直線的に広がった後、端部に沈線を施す。16は高台は外方に直線的に広がり、端部に平坦面を作っている。高台見込にヘラ記号が残る。15, 17は底部は回転ヘラケズリ調整後、高台を貼付し回転ナデ調整を施している。15は高台は内湾気味に広がり、端部に平坦面を作っている。器壁は内湾しながら立ち上がった後、外方に直線的に立ち上がる。17は高台は外反しながら伸び、端部に凹面を作る。器壁は外方に直線的に立ち上がる。18は底部回転糸切後、高台を貼付し回転ナデ調整を施す。内面見込にはナデ調整を施している。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を尖り気味にしている。高台は外傾気味に広がり、端部で平坦面を作る。21, 22は高台を持たないタイプの壺で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施す。21は底部に回転糸切を施す。口縁部は外反気味に立



第61図 第⑤層出土遺物 2

ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。22は底部に回転ヘラ切り調整を施している可能性がある。口縁部は外方に直線的に立ち上がった後やや外傾する。端部は尖らせている。19は盤で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部は回転糸切後、高台を貼付し回転ナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。高台はやや外傾気味に貼付し、端部に平坦面を作る。20は鉄鉢形土器で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部の立ち上がりは内湾しながら伸び内傾する。端部は丸く仕上げている。口唇部内面に4条の沈線が残る。23は皿で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整、内面見込にナデ調整、底部に回転糸切後回転ナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。器壁と底部の界線は明確である。24は把手で、内面に回転ナデ調整を施し、外面には把手を貼付してナデ調整している。25は鉢で、器壁内外面ともに回転ナデ調整、底部に回転糸切痕が残る。外面に刺突状の工具痕が残る。26は壺または壺の口縁部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾気味に立ち上がった後外傾する。端部は尖り気味に仕上げている。27は円面硯で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。脚部内面見込には自然釉が多量に付着している。中央に墨を磨る陸を設け、脚部外周に墨を溜める海を作る。脚部には2種類の透かしを施す。脚部の広がりは裾部で外反し、端部に平坦気味の面を作っている。

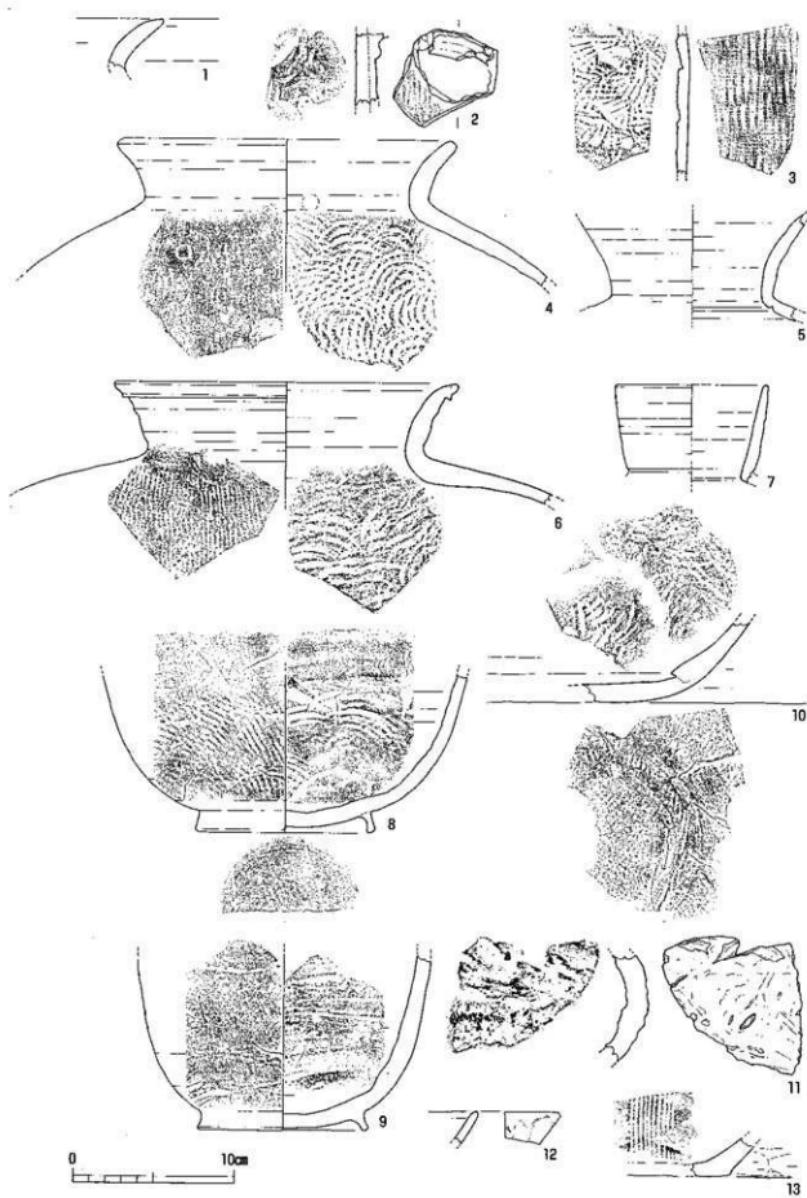
第62図1～27は須恵器で、1～7は蓋である。1～3は口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。1は天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施し、小型の摘みを貼付した後回転ナデ調整している。口縁部は内湾しながら伸び、端部を尖らせている。2は天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施した後、ヘラ削り出しにより小型の摘みを作るが、実際に摘むことはできず、形骸化しているものと考えられる。天井部内面にはナデ調整が施されている。3は天井部外面に回転ヘラケズリ調整後摘みを貼付し、回転ナデ調整を施す。天井部内面にはナデ調整を施している。器壁の広がりは肩部で外傾する。4、5は天井部内面に回転ナデ調整後ナデ調整を施し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整後、扁平宝珠状摘みを貼付して回転ナデ調整している。口縁部は欠損している。6、7は口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施し、天井部外面に輪状摘みを貼付した後、回転ナデ調整を施している。6は口縁部は下方に屈曲し、やや外反する。端部は尖り気味にしている。輪状摘みは外方に直線的に立ち上がり、端部に平坦面を作っている。7は口縁部は外反気味に伸びた後、下方に屈曲する。端部は欠損している。輪状摘みは外方に直線的に立ち上がり、端部に水平な平坦面を作て沈線を施している。8は瓶で、内外面ともに回転ナデ調整、底部に回転ヘラ切り調整を施す。器壁は内湾気味に立ち上がった後内湾し、袋状になるものと考えられる。9、10は壺で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。9は口縁部は上方に直線的に立ち上がり、10は内側に直線的に伸びた後やや反り上がり、端部は尖り気味にしている。口縁部に重ね焼の痕跡が残る。11、12は甌で、11は体部内面及び肩部外面に回転ナデ調整、肩部下外面から底部外面まで回転ヘラケズリ調整を施す。肩部外面には上下各1条の沈線の間に刺突文が施され、肩部及び体部の界線付近に透かしを施している。12は体部内外面に回転ナデ調整を施し、体部下外面から底部外面にかけて回転ヘラケズリ調整を施す。内面に粘土塊、外面にタールが付着する。13～26は高壺である。13は脚部で、内外面ともに回転ナデ調整及び指頭圧痕を施す。脚部の広がりは外方に直線的に伸びた後裾部で外反する。14、15、17は内外面ともに回転ナデ調整を施す。14は器壁は器部下でやや屈曲した後外方に伸びる。脚部は裾部で外反しながら伸びる。15は器部内面見込にナデ



第62図 第⑤層出土遺物 3

調整を施す。器壁は内湾気味に伸び、脚部の広がりは外反気味に伸びる。17は器壁は内湾気味に立ち上がり、脚部は外反しながら伸びる。脚部上部2方向に線状の透かしを施し、下部では2条の沈線の間に透かしを施している可能性がある。16は脚部内外面に回転ナデ調整、器部内面見込に回転ナデ調整後ナデ調整を施す。脚部の広がりは外反しながら伸びた後、下方やや外側に屈曲する。端部には細い平坦面を作る。18, 19, 21, 22は内外面ともに回転ナデ調整を施し、器部内面見込にナデ調整を施す。器壁は内湾気味に立ち上がり、18, 19は脚部の広がりが外反気味に伸びる。また21, 22は裾部で外反し、端部で平坦面を作る。21は下端を、22は上下両端をやや拡張させている。脚部には18, 21が2方向、19は3方向の線状透かしが施され、18には器部から脚部にかけてヘラ記号が施されている。20は内外面ともに回転ナデ調整を施し、器部内面見込にナデ調整を施す。器壁は外方に直線的に立ち上がり、脚部は外反しながら広がる。2方向に透かしが施されている。23は内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。脚部は外反しながら伸び、2方向に線状透かしを施す。24, 25は内外面ともに回転ナデ調整を施し、器部内面見込にナデ調整を施す。24は器壁は内湾しながら立ち上がり、脚部は外反しながら広がる。端部には平坦面を作り、両端をやや拡張させ、下端をやや外方に広げている。脚部には2条の沈線が施され、上部に線状透かし、下部に台形透かしが施される。器部内面見込にヘラ記号を施す。25は器壁は内湾気味に立ち上がり、脚部は外反気味に広がる。脚部2方向に台形透かし、透かし下方に2条の沈線が施される。26は内外面ともに回転ナデ調整を施し、内面見込にはナデ調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。27は平瓶で、体部内外面ともに回転ナデ調整を施し、体部外面下には回転ヘラケズリ調整を施している。底部外面は風化のため調整不明である。口縁部は回転ナデ調整で別途整形した後、体部にやや斜方向で貼付しナデ調整を施している。口縁部の立ち上がりは外反気味である。

第63図1～11は須恵器で、1～6は壺である。1は口縁部で内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。2は融着須恵器で、壺片に高台付坏底部が融着する。壺片は内面に青海波文、外面に平行タタキが施されている。3は体部片で、内面に車輪文、外面に平行タタキを施す。4～6は口縁部内外面ともにナデ調整を施す。4, 6は肩部内面に青海波文、肩部外面に平行タタキを施す。4は肩部外面に小丸状のスタンプ文が施され、多量の自然釉が被っている。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。6は肩部外面頸部側にカキ目が残る。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は外側に折り曲げて整形し、尖り気味に仕上げている。5は口縁部は外反しながら立ち上がる。頸部下内面に粘土の接合痕が残る。7は壺の口縁部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。外面に2条の沈線が残る。8～10は壺または壺で、8は内面に青海波文及びナデ調整、外面に平行タタキ及びナデ調整を施す。また底部には高台を貼付し、回転ナデ調整を施す。器壁は内湾しながら立ち上がり、高台はやや外傾し端部に平坦面を作る。9は内面に粗いナデ調整、外面に平行タタキ及びナデ調整を施す。底部には高台を貼付し、回転ナデ調整を施す。器壁は内湾しながら立ち上がり、高台は外反気味に伸びて、端部に平坦面を作る。10は内面に青海波文及びナデ調整、外面に平行タタキ及びカキ目調整を施す。粘土の接合痕が残る。11は器種不明の遺物である。内外面ともにナデ

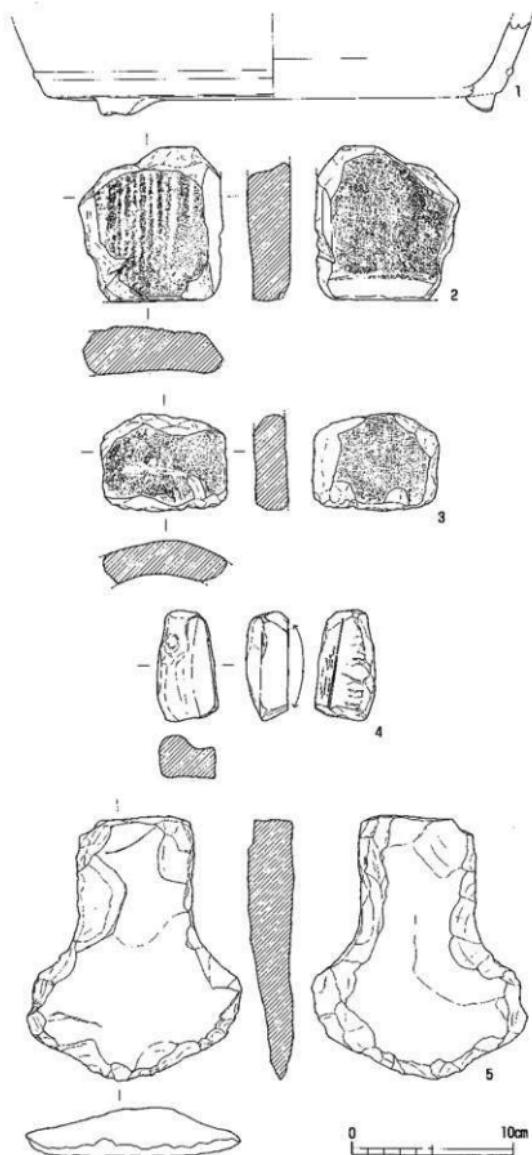


第63図 第⑤層出土遺物 4

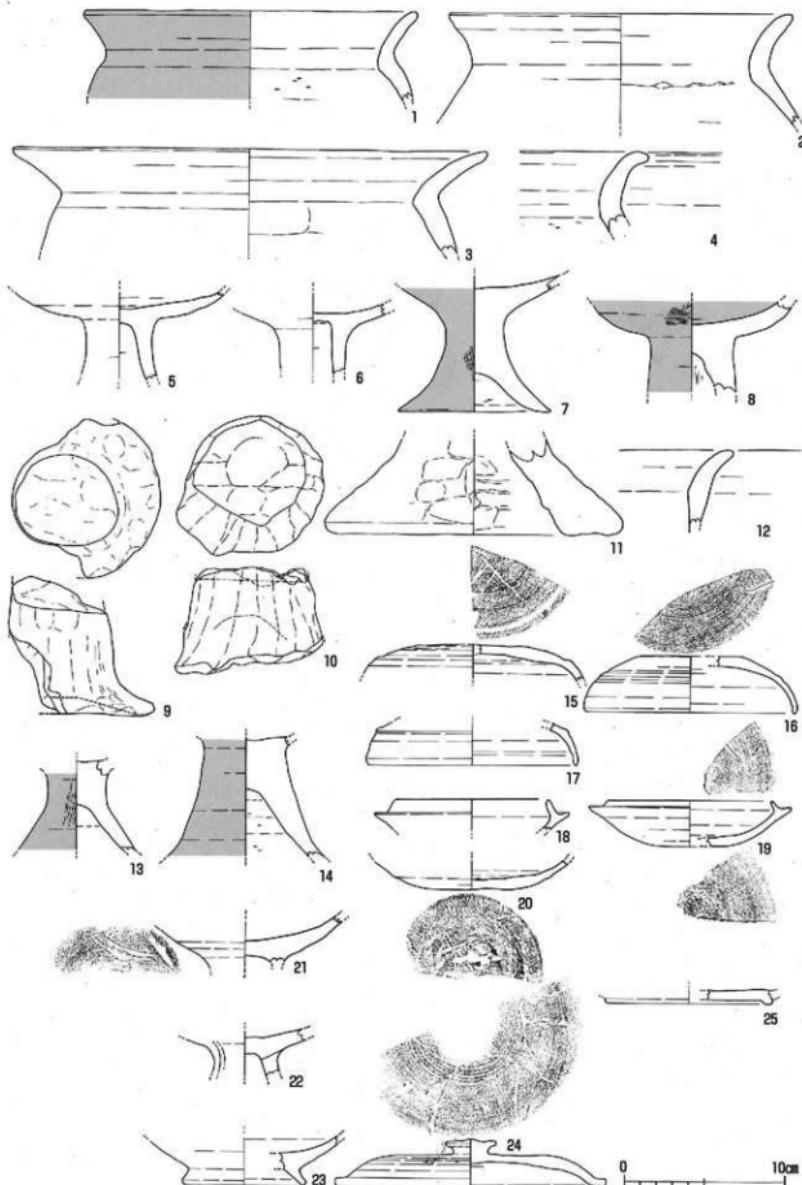
調整を施すが、外面には裂痕が多く見られ、内面には若干の金属滓が付着する。また整形時のタキ上げが不十分なためか、断面には空泡ができる。製品としては劣悪である。生産関係遺物である可能性もある。12、13は直上層である第4-1層からの混入遺物である可能性が高い。12は青磁碗で、内外面ともに施釉し貫入が入る。外面には線描の鎧蓮弁を施す。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。13は内外面にナデ調整を施し、内面には1単位10条の櫛目が施されている。器壁の立ち上がりは内湾気味である。

第64図1は瓦質土器奈良火鉢浅鉢である。焼成が悪く土師質に近いことから、瓦質土器の模造品の可能性もある。内外面ともにナデ調整を施し、底部に脚、外面に1条の突帯を貼付している。器壁は外方に直線的に立ち上がる。直上層である第4-1層からの混入遺物である可能性が高い。2、3は布目瓦である。2は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に繩タキ痕が残る。3は丸瓦で、凹面に布目痕、凸面は風化のため調整不明である。4は砥石で、1面を砥面として使用している。5は打製石斧である。第⑤-0層（第65、66図）

第65図2～6、9～14は土師

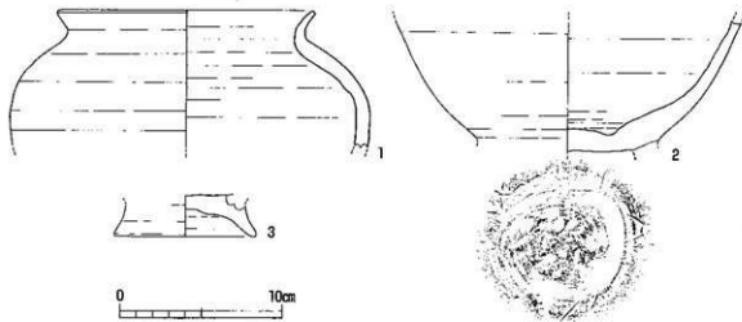


第64図 第⑤層出土遺物5

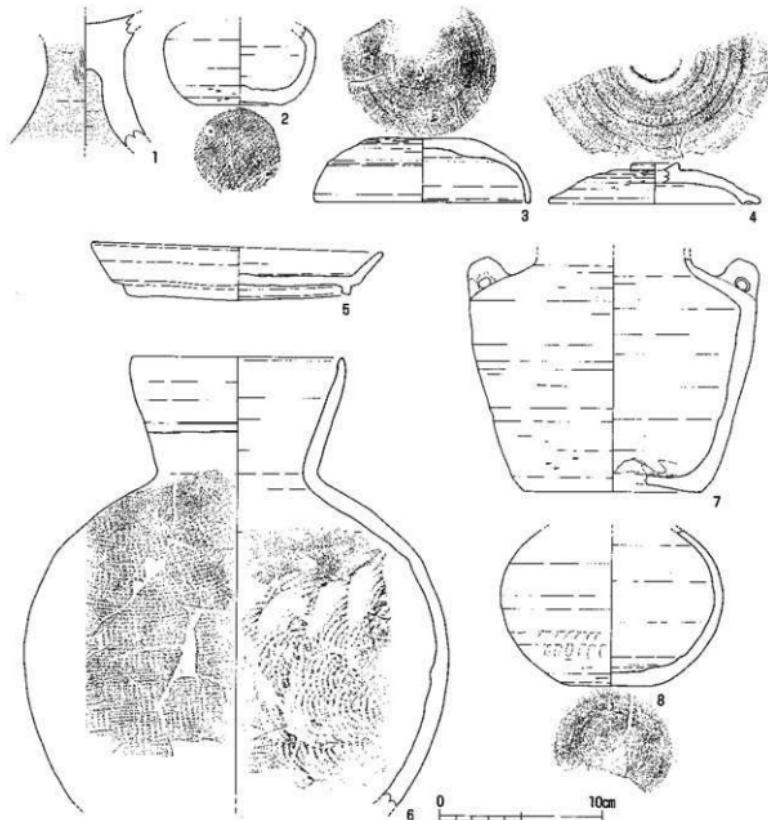


第65図 第5-0層出土遺物 1

器、1, 7, 8は赤彩土器である。1~3は甕で、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。肩部外面は風化のため調整は不明である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は1が丸く、2, 3が尖り気味に仕上げている。3は口縁部の傾きが大きい。1の外面に微量の赤彩が残る。4は甕の口縁部で、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部に平坦気味な面を作る。5~8は高坏である。5は風化が著しいが、器壁内外面にナデ調整、脚部外面にヘラミガキ調整を施している可能性がある。器壁の立ち上がりは内湾気味で、脚部の広がりは外反気味である。6は風化が著しく調整は不明である。器壁の立ち上がりは内湾気味で、脚部は下方に直線的に伸びる。7は器部内外面は風化のため調整不明であるが、脚部外面に若干のハケ目及び赤彩が残る。脚部内面にはヘラケズリ調整が施されている。器壁は内湾気味に立ち上がり、脚部の広がりは外反気味に伸びて、端部を尖らせている。8も風化が著しいが、器部外面にハケ目調整、器部内外面に赤彩が残る。器壁は内湾気味に立ち上がり、脚部はやや外方に直線的に広がる。9~11は土製支脚の脚部で、9, 10は外面にヘラミガキ調整を施す。9は底部が上底になっている。裾部は外反しながら広がり、端部は尖り気味に仕上げている。10は穿孔が貫通し、底部は縁込まれている。裾部の広がりは外反気味である。11は外面に粗いナデ調整を施し、外面には指頭圧痕が残る。裾部は外反気味に広がり、端部に平坦面を作っている。12は甕の口縁部と推定され、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。体部外面は風化のため調整不明である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。13, 14は赤彩土器高坏脚部で、風化が著しい。13は外面にハケ目調整及び赤彩が残る。裾部は外反気味に広がる。14は外面に赤彩、脚部内面にヘラケズリ調整が残る。裾部は外反気味に広がる。15~25は須恵器で、15~17は坏蓋である。15は口縁部内外面ともに回転ナデ調整、天井部外面に回転ヘラケズリ調整後ヘラ記号、天井部内面にナデ調整を施す。器壁は肩部で稜を作り外傾する。16は内外面ともに回転ナデ調整を施し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。口縁部は肩部で稜を作った後、内湾気味に伸び内傾する。端部は尖り気味に仕上げている。端部内側に沈線が施されている。17は口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。口縁部は肩部で稜を作り、内湾気味に伸びる。端部は尖り気味に仕上げており、内側に沈線を施している。18~20は坏身で、口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。18は口縁部で外傾し、端部を尖り気味に仕上げる。一方、口縁部内側にはかえりを施しやや反り上げる。かえり端部は尖り気味にしている。19は口縁部で外傾気味となり、端部で尖り気味としている。一方、口縁部内側には小型のかえりを施し端部を尖らせている。底部外面は風化のため調整不明であるが、内面見込にヘラ記号が残る。20は器壁が内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転ヘラ切り調整後ヘラ記号を施している。21, 22は高坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。21は外面にヘラ記号が残る。器壁は内湾気味に立ち上がる。22は器壁は外方に直線的に立ち上がる。脚部3方向に透かしが施されている。23は高台付坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、内面見込にナデ調整を施している。器壁は内湾気味に立ち上がり、高台は外方に直線的に広がる。端部は丸く仕上げている。24は扁平宝珠状の摘みを持つ蓋で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整、天井部内面にナデ調整を施し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整後、摘みを施し回転ナデ調整を施す。口縁部は外反後下方に折れ曲がり、端部は尖らせている。25は高台付坏で、焼成が悪く風化が著しい。高台貼付後の回転ナデ調整が確認できるのみである。



第66図 第5-0層出土遺物 2

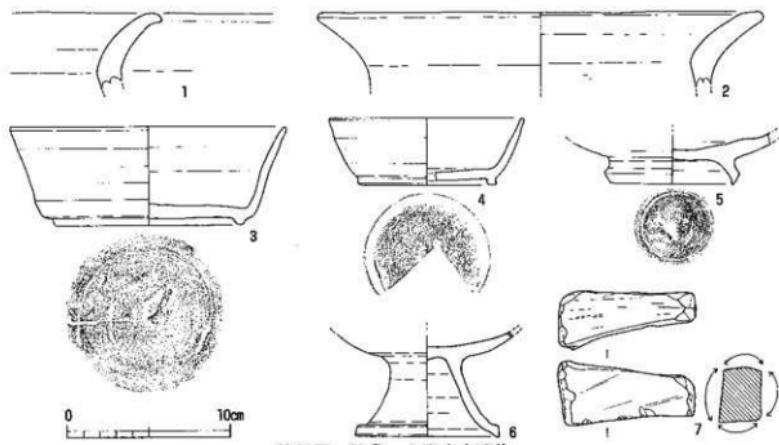


第67図 第5-1層出土遺物

第66図1, 2は須恵器壺で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。1は口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部で平坦面を作っている。2は底部に高台を貼付し、高台見込及び内面見込にはナデ調整を施している。3は上師質土器壺で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部には高台を貼付している。高台の広がりは外反気味で、端部は尖り気味に仕上げている。

第⑤-1層（第67図）

第67図1は赤彩土器高坏脚部で、器部内面は風化のため調整不明であるが、脚部内面はナデ調整後赤彩を施し、脚部外面はハケ目調整後赤彩を施す。脚部の広がりは外反気味に広がる。2~8は須恵器である。2は壺で、体部内外面ともに回転ナデ調整を施し、体部下に回転ヘラケズリ調整、底部に静止糸切痕を残す。体部はやや肩部が張ったタイプである。3は壺蓋で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。口縁部は内湾しながら伸び、端部を尖り気味に仕上げている。肩部外面に1条の棱、口縁部内面に1条の沈線を施している。4は摘みを持つ蓋で、口縁部内外面及び摘み部分に回転ナデ調整、その他外面に回転ヘラケズリ調整、内面見込にナデ調整を施す。口縁部は天井部から内湾しながら伸びた後外傾し、端部を丸く仕上げる。一方、口縁部内側には小型のかえりを施す。かえり端部は尖らせていている。5は皿で、口縁部内外面に回転ナデ調整を施し、底部に回転ヘラ切り調整後、付け高台及び回転ナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。6は壺で、口縁部内外面に回転ナデ調整を施し、口唇部下にカキ目調整を施す。一方、体部内面には青海波文、体部外面に平行タタキ及びカキ目調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり内湾する。端部は尖り気味に仕上げている。7, 8は瓶で、体部内面及び体部外面上部に回転ナデ調整、体部外下面下部に回転ヘラケズリ調整を施す。7は底部内面にハケ状の痕跡を残す。肩部及び体部、体部及び底部の間には明確な界線が施され、肩部に把手が後付けされている。肩部には多量の自然釉が付着している。8は体部外面下方に飛鉈状の圧痕が残る。体部の形状は扁平球状に近く、肩部及び底部と体部の間に界線は見られない。



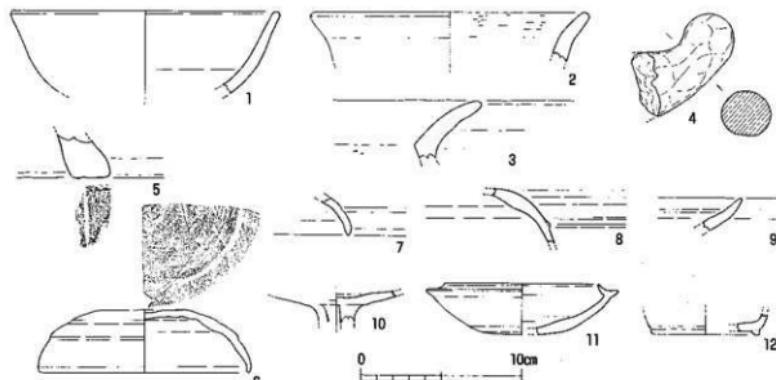
第66図 第⑤-2層出土遺物

第⑤—2層（第68図）

第68図1、2は土師器の口縁部である。1は壺で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げる。2は甕または瓶で、口縁部内外面にナデ調整を施し、体部内面にヘラケズリ調整を施す。口縁部の立ち上がりは外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。3～6は須恵器である。3～5は高台付坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し底部に高台を施す。3は口縁部の立ち上がりは器壁中程から外方に直線的で、端部は尖り気味に仕上げる。高台は断面逆台形状を呈す。4は口縁部の立ち上がりは内湾気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。高台は断面方形状を呈す。外面に自然軸が付着している。5は高台内側端部が内側に突出する。端部は尖り気味に仕上げている。器壁は内湾気味に立ち上がる。6は高坏で、外面及び脚部内面に回転ナデ調整を施し、内面見込にナデ調整を施す。器壁は内湾しながら立ち上がり、脚部は据部で外反し端部内側を外方に尖り気味に仕上げている。7は砥石で、4面を砥面として使用している。

第⑥層（第69図）

第69図1～5は土師器である。1は内外面ともにナデ調整を施す。口縁部の立ち上がりは外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。2は甕または壺の口縁部で、外面にナデ調整を施し、内面は風化が著しいが、ハケ目調整を施している可能性がある。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。3は甕の口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。4は瓶の把手で、外面にヘラミガキ調整を施す。5は甕脚部で、風化のため調整は不明である。底部に工具痕が残る。6～12は須恵器である。6～8は坏蓋で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。6は天井部外面は回転ヘラケズリ後、ハケ状の工具及びナデ調整にて調整している。外面には1条の稜が作られ、口縁部は稜から内湾気味に伸びた後内傾し、端部を尖り気味に仕上げている。7は外面に1条の稜を作る。口縁部は内湾しながら伸び、端部は尖らせている。8は天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施し、外面に1条の稜を作る。口縁部は内湾しながら伸びる。



第69図 第⑥層出土遺物